辺境貴族、成り上がる

～イリスガルド興国記～

三門鉄狼
Mikado Tetsurou
Illustrator 東山エイト

ド田舎貴族

未来を書きかえ

出世街道まっしぐら!!

運命さえも操る成り上がりファンタジー、開幕!

GA文庫

「辺境貴族、未来の歴史書で成り上がる～イリスガルド興国記～」試読版

開幕　――プロローグ――

王国歴435年10月04日

イリスガルド王国、王城。

「……あのような辺境貴族の若造が姫殿下に拝謁を許されるとは……」

「……見たまえ、あのみすぼらしい装束（しょうぞく）……」
「……痩（や）せこけて、まるで鶏ガラだ。貧相な……」
「……田舎（いなか）貴族……」
「……貧乏貴族……」

アルト・ランデオンは、周囲で交わされるヒソヒソ声をまるで意に介することなく、赤い絨毯（じゅうたん）の上を悠然と歩いていく。

みすぼらしい装束、とは言っても周りの貴族のものに比べれば簡素というだけである。他の男の、肩にふけが浮いた服に比べれば、おろしたてで、よっぽど清潔感がある。

痩せているのも、飽食でぶくぶくと太った貴族たちに比べれば、という話で、実際には誰(だれ)がどう見ても彼のほうが健康体だと思うだろう。

要するに、単なるやっかみ、陰口だった。

ただ、アルト・ランデオンが辺境貴族の若造というのは、紛(まぎ)れもない事実である。

イリスガルド王国の外れの外れにある、ちっぽけなランデオン領を預かる貧乏男爵家。

豊かな農地を持つわけでも、特別な産業があるわけでも、交通の要衝にあって発展した都市を抱えているわけでもない、田舎も田舎。

半年ほど前、帝国との戦争でランデオン男爵と

その妻が亡くなり、その田舎も田舎の領地を引き継いだのが、十九歳のアルトであった。

この場にいる貴族の誰一人として、そのとき、そのことを気にかけた者はいない。

小貴族が戦死して代替わりするなど、戦乱のこの時代では日常茶飯事。広大な領土を有していたり、代々政府の要職に就いている侯爵や公爵ならいざ知らず、たかが男爵ごとき……。

しかし、その男爵が、今イリスガルドの王女に拝謁しようとしているのだ。

とはいえ、ないことではない。

武勲をたてた者に拝謁を許すのは、戦意を保つためには有効なことだ。きっと親の戦死を労わり、子にも同様の励みを期待するために王女が男爵を呼んだのだろう。王女殿下は細やかな気配りのできるお方だから――貴族たちはそう考えていた。

だから、貴族たちのヒソヒソ声は、ランデオン男爵への嘲笑混じりの釘刺しだった。

『お前は本来この場にいられるような人間ではないのだぞ』という。

しかし――。

「王女殿下。本日はお招きいただき誠にありがと

うございます」
「いえ、ランデオン男爵。貴方とはもっとたくさん、お話ししたいと思っておりました」
「光栄の至りです。ですが、それは後ほど」
単なる労い以上の、どこか親しげでさえある会話を交わす王女と男爵。
この二人は既知の間柄だったのか……？　わずかな困惑が貴族たちの間に広がる。
その困惑は次の瞬間、決定的になった。
「クロノ」
「はいはい」
男爵は傍（そば）に控えていた侍女に命じ、箱を持って

こさせた。

侍女が蓋（ふた）を開けると、男爵は眩く輝く首飾りを取り出した。

「な、なんだ、あの金細工は……」

「まさか、あれが全部本物の金なのか……」

「貧乏貴族が、どうやってあんなものを……」

王女との会話以上に、物質的にあり得ないはずのものが現れて、貴族たちの動揺は抑えられなくなっていく。

戦争のときに奪ったのか？　金脈でも発見した

のか？　いやいやメッキじゃないのか？　憶測と動揺が大広間に広がっていく。

そんな、貴族たちの滑稽とも言える姿をまるで意に介さず、

「殿下のお美しさには、到底敵（かな）うものではございませんが……お近づきの印に、お受け取りいただけますか？」

「まあ――では、つけてくださいますか？」

あろうことか。

貧乏貴族で田舎貴族の若造は、その首飾りを自らの手で、王女殿下の首につけたのだった。

ごくちっぽけな領地しか持たない辺境貴族である、アルト・ランデオン。

彼が、王城へ参じ、王女殿下に拝謁し、その財力からはどう考えても不相応な、金の首飾りを贈ることができた、その理由。

そこには、ある一冊の歴史書――それも未来の歴史書が関わっていると知る者は、当然、居並ぶ貴族たちの中にはいない。

その成功譚は、半年ほど前、ランデオン領の小さな屋敷から始まる――。

第1幕　辺境貴族、未来の歴史書を手に入れる

王国歴435年04月08日

「あーもー、ぐちゃぐちゃじゃないか」

アルトは、屋敷の蔵の中を見回して、ため息をついた。

貴族の持つ蔵にしては、かなり小さなものである。

豊かな土地の豪農なら、この五倍の蔵を持っているかもしれない。

そんなこじんまりとした蔵に、とにかく乱雑に

ものが詰め込まれていた。

ざっと見たところ、錆びた武具に、古びた家具、大して価値のない工芸品、魔力の切れた魔道具……ろくなものがない。

このままとって返し、扉を閉じて見なかったことにしたいところだが、そういうわけにもいかない。

万が一、ここに貴重品があれば、男爵家の相続品として届け出る必要があるのだ。

「面倒くさいなぁ。親父殿も、大した量のない遺品なんだから、整理しといてほしいもんだ」

ぼやきながら、アルトは仕方なく遺品の整理、というより発掘作業を開始した。

アルトの父は、ついに先月、クラーナハ平原にて起こった、帝国との戦闘の際に戦死した。たまたま旅の途中で陣中見舞いにと立ち寄った母も一緒だった。

この戦乱の時代、戦場での死は珍しいものではない。

殊に、アルトの父は、貧乏な小貴族でありながら、王への忠義の厚い騎士であった。そういう人間ほど、早死にするものだ。

そんなわけで、若くして男爵領を継ぐことになったアルトの最初の仕事が、この遺品整理なのだ

った。

使用人にでも手伝わせれば楽なのだが、そんな余裕もない。使用人は屋敷を取り回すので精いっぱいなのだ。

「しかしろくなものがないなぁ……届け出はしなくていい分、なんの足しにもなりそうにない……お？」

と、聞かせる相手もないままに、ブツブツ文句を言いながら、遺品を、ゴミと、比較的ゴミではないものとに分けていたアルトは、ふと手を止めた。

上に乗っていた、脚の折れた椅子（いす）をどけて、それを引っ張り出す。

「絨毯？　違うな……召喚魔法陣じゃないか！」
布地と見まごうような厚手の紙に、奇妙で複雑な文様が描かれたそれは、まさに魔法陣だった。
「これは……ひょっとすると、ひょっとするかも」
アルトはその紙を手で広げて伸ばす。
魔法陣によって『この場に存在しないもの』を召喚する召喚魔法は現在では失われた技術である。ごく稀に遺跡などから発見される魔法陣は、ほとんどが使用できないものだが、それでも研究材料や美術品として、高値で取引される。
「まして、ここまで保存状態がいいとなると……」
ごくり、と唾を飲み込むアルト。

もしやこれは、貧乏貴族生活脱出のチャンスなのでは……。

と、胸を高鳴らせるアルトの耳に、パチパチパチ、と木炭がはぜるような音が。

「え……？　ちょっと、なんでなんでなんで！」

魔法陣が四隅から、火を発していた。

火はみるみるうちに紙を灰に変えながら、中央へと集まっていく。

「うわあああ、俺のお宝お宝お宝――！」

アルトは手で叩いて火を消そうとするが、まるで消えない。ただの火ではないようだった。

水を取りにいくのも間に合わない。

火はあっという間に魔法陣を包み込み、最後にボンッと変な音を発し――

――そこに、一人の少女が現れた。

「……は？」

意気消沈してうなだれていたアルトは、顔をあげる。

髪の毛が何束（なんたば）かごとに色の違う、変な外見の少女である。年齢は十三歳くらいに見える。服装は、絹のような綿のような不思議な素材。見るからに、この世の存在ではない。

なんだか知らないが、一冊の本を両手で抱えている。

「どうもどうも！」

やたらに元気よく、馴(な)れ馴れしい口調で少女が言ってくる。

「わたしはクロノ！　女神スクルド様に仕える〈刻(とき)の精霊〉でっす以後お見知り置きを！　このたび召喚魔法陣でこの歴史書を喚び出したのはあなたですね？　ではさっそくこれをお受け取りください。まずはこの歴史書の説明をってちょっとぉなんで話してる途中でいなくなろうとしてるんですかぁ！」

大声で叫んで肩を摑(つか)んできた少女――〈刻の精霊〉クロノとやらを、アルトはいじけた顔で振り返って答える。

「だって、魔法陣は金になるけど、精霊は金にならないだろ」

「なーーーーー！」

アルトの発言に頭を抱えるクロノ。

とりあえずリアクションが大げさでやかましい。

「なんという不敬ですか！　精霊で金勘定するなんて！　だいたい、精霊が現れて、なんでそんなリアクションがうっすいんですか!?」

確かに、精霊というのは希少な存在だ。

古代の勇者が剣を授(さず)かったとか、伝説の魔法使いが召喚して秘術を教えてもらったとか、そういう物語の中の存在だ。

現代でも、目撃したという話を聞かないわけではないが、だいたいが眉唾物(まゆつばもの)である。

つまり、アルトは今かなり貴重な体験をしているわけなのだが……。

「なんていうか……お前の態度のせいで、全然ありがたみを感じない」

「そ、そんなことないですよぉ。世にも珍しい精霊ですよー、坊(ぼっ)ちゃん嬢ちゃん寄ってらっしゃい見てらっしゃい！」

「……」

喋(しゃべ)れば喋るほど、精霊らしい雰囲気が、真夏の氷魔法のように溶け消えていく様をジト目で眺めたあと、アルトは無言で立ち去ろうとした。

「待ってくださいよぉ！　召喚者に召喚物を手渡さないとか精霊的に困るんです！　スクルド様に叱(しか)られちゃいますから！　ほら、この歴史書受け取ってください！　タダですから！」

「歴史書、ねぇ」

腰にしがみついてアルトを引き止めつつ、持っていた本を差し出してくるクロノ。

アルトは仕方なく立ち止まった。

どうやら、さっきの火は召喚魔法の発動だったらしい。

紙を伸ばすアルトの手つきが発動条件と一致し、この歴史書（と、やかましい精霊）を召喚してしまったのだ。恐ろしい偶然だが。

「しかし、歴史書なんてあってもなぁ……」

本は確かに貴重品だが、それでも宝石や魔道具に比べれば高が知れている。先ほどの魔法陣より高価ということはあり得ないだろう。

「そんなにお金が必要なんですか？」

クロノが首をかしげて訊いてくる。

「必要ってわけじゃない。俺はただ、なるべく楽

して、楽な人生を手に入れたいだけだ」

そう。

義に厚く、質実剛健な先代男爵の子とは思えないほど、あるいは、そんな親を見て育ってきたからこそなのか、アルトは忠義心とは無縁の性格だった。

主人のために命をかけて戦うなど真っ平御免。

これからの貴族生活、戦争に巻き込まれる事態は、できる限り避けて避けて避けて通して、安心安全、無難無事に人生を過ごすつもりだった。

ただ、この時代、そうやって楽に生きるにも金が必要だ。

ランデオン領のような貧乏な土地では、貴族といえど生活は安泰ではない。不作の年だってあるし、戦争に巻き込まれて農地が焼かれたりもする。

そうした場合、王のために戦いに参加して、代わりに援助や庇護を得るしかない。

貧乏貴族には、それくらいしか道がないのだ。

「俺は戦争で痛い思いとかしたくないし、戦死なんか冗談じゃない。だから、少しでも領地を広げて、豊かにして、戦争をしなくてもいいくらいの領地を治めながら、のんべんだらりと暮らしたい。そのために必要なのは、まあとりあえずお金だろう、というわけ」

アルトのその考え方を、他の貴族が聞けば奇異に思ったことだろう。

なにしろ今は戦乱の時代。戦って領地を手に入れれば豊かになり、ともすれば大国の主すら夢ではない、弱肉強食、下克上の世界なのだ。

そんな時代において、戦士階級である貴族が、こともあろうに『痛い思いをしたくない』など、正気の沙汰ではない。

しかし、アルトの話を聞いたクロノはニヤリと笑った。

「なるほどなるほど。だったらご主人、この歴史

書はあなたの願いを叶（かな）えてくれるかもしれませんよ？」

「はぁ？」

馴れ馴れしくご主人などと呼んでくる精霊の少女に訝しげな視線を向けつつ、アルトは押し付けられた本を仕方なく受け取った。

黒い革張りの、立派な装丁だ。

表紙には、金の箔押しでタイトルが書かれている。

〈イリスガルド興国記〉

イリスガルド王国は、ランデオン男爵領を含む、

この辺り一帯を治める国である。

勢力的にはいたって弱小。隣にできた新興の大国、神聖アルスタニア帝国に押されっぱなしの、小国家だ。

その歴史を記述した本、というわけか。

「確かに、イリスガルドは、王家の歴史の長さだけは、大陸で一、二を争うけど」

それにしたって、このような重々しい装丁の本にまとめるほどの、大層な歴史があるとは思えないが……。

そう考えながら、アルトは本を開き、パラパラとページをめくって、ふと手を止めた。

「なんだこれ、ほとんど白紙じゃないか」

本は、十ページほどめくると、インクで記された文字がなくなり、以降ずっと、やや日に焼けた黄色いページが続くだけだった。

アルトは、ページを戻り、最後の記述を読む。

王国歴435年03月、初の全面衝突となったクラーナハ平原での戦いで王国軍は敗走。およそ半数の兵を失う。その戦死者とされた者の中にはランデオン男爵とその妻もいた。こうして王国軍は、アルスタニア帝国との初戦にて、完全なる敗北を喫(きっ)したのだった。この戦いを『クラーナハの大敗』

と呼ぶ。

「ん……これってどういう……」

アルトは困惑する。

つい一カ月前に行われた戦争の記録がすでに記されている。

それはつまり、この本が、現在進行形で記述中のものだということだ。

しかし、本の見た目や、紙の古び具合は、相当の年数の経過を思わせる。

この矛盾はどういうことか……。

「これは未来の歴史書です！」

その答えを、クロノは簡潔に告げた。

「未来の……？」

「そうです！　はるか後の時代において、ある歴史家が書くはずの書物なのです！」

アルトは考える。召喚魔法で現れたのだ、そういうこともあるかもしれない。

「しかし、じゃあ記述が途中なのはどうしてだ？　未来の歴史書なら、これから先のことも書いてなければおかしいだろう」

「それはですね」

クロノは、にっひっひー、と精霊とは思えない俗っぽい笑い方をして、

「この歴史書の所有者が好きなことを書き込めるようにですよ！」

「は？」

「この歴史書には、未来を司（つかさど）る女神スクルド様のお力が込められています。それによって、所有者、つまりご主人の書き込んだことが現実に起こるのです。あ、もちろん、歴史書であるからには、なんでもかんでも好き勝手にというわけにはいきま

せん。そこにはルールがありますので、それはこれからおいおい探っていってもらうとして――」

「待って待って待って」

すごい勢いで喋るクロノを、アルトは止める。

「これが、未来の歴史書だってのはいい。魔法陣で未来のものを召喚したって話も聞いたことがあるしな。けど、なに？　書き込んだことが実現するだって？」

「はい、そうですよ。どうです、すごいでしょう！」

腰に両手を当て、得意満面で言ってくるクロノ。

アルトはそんな彼女に歴史書を押し返した。

「え、ちょ、なんですか？」

「そんなうまい話が信じられるか。これでも俺は現実主義者なんだ」

「またまたぁ、戦争しないで金持ちになりたいとか言ってる貴族が現実主義なわけないじゃないですか」

「む……」

痛いところをつかれた。

確かに、楽して暮らしたいと公言してはばからないアルトだが、そのための具体的な方策がある わけではなかった。

商売を始めるにしてもなんにしても、元手が必

要なのだ。それすら、この辺境領地では不足している。

もし、本当に、書き込んだことが実現する本などが存在するなら……。

「ほらほら、どうでしょう？　試しになにか書いてみてくださいよぉ。今なら無料ですぜぇ――ああ、ちょっと待って！　なんで蔵の扉を閉めようとするんですか！」

「気にはなるが、お前の態度があまりにも胡散臭（うさんくさ）いから、ちょっと考えさせてもらう」

「あ、待って待って。だからって、ここに閉じ込めることないじゃないですか!? ひどいです！　く

らいよぉこわいよぉ！」

「やかましいわっ」

アルトが、喚く精霊を無視して扉を閉じようとしたところへ。

「坊っちゃま！　大変です！」

「どうした、クララ？」

屋敷の古参メイドが太った身体を揺らしながら駆けつけてきた。

彼女はアルトが生まれる前からランデオン家に仕えている。そのため、未（いま）だにアルトのことを昔の呼び方で呼んでしまう。

扉の隙間（すきま）の前に立ってクロノを隠すアルトに、

彼女は唾を撒き散らしながら報告する。

「村から早馬が来て、ロロノ川の上流で洪水が起こりそうだと……」

「なんだって!?」

ロロノ川は、この屋敷のすぐ近くを流れる川である。

ランデオン領を東から西へ横断しており、領地に水をもたらすと同時に、運送路としても使われる重要な河川だが、時折、雪解け水や大雨で氾濫することがある。厄介な存在だった。

「春の氾濫は早くても五月だろう……まだどの村も、対策ができてないはずじゃないか」

「ええ、そうです。それに下手をすればこの屋敷も……」

「っ……」

ロロノ川の増水の際には、いつも間に合わせの堤防を造り、なんとか被害を防いでいた。なにしろ間に合わせなので、一度の増水で壊れてしまい、また造り直しになる。長持ちする堤防を造れるような余裕はこの貧乏領地にはないのだ。

「とりあえず、貴重品をまとめて馬車に積み込んでくれ。最低限のものだけでいい」

「わ、わかりましたっ！」

メイドは顎（あご）の肉を震わせて頷（うなず）くと、屋敷へ駆け

戻っていった。

その後ろ姿を眺めながらアルトは考える。

自分も貴重品の積み込みを手伝うべきか、否(いな)、なにかできることはないのか……。

「ご主人、ご主人」

「なんだ、うるさいぞ――」

背後から聞こえてきたウキウキした声に、腹立たしげに返すアルトの目の前に、黒い革張りの本が差し出された。

未来の歴史書。

書き込んだことが実現するという、女神スクルドの力が込められた本……。

「……」

アルトは本を受け取って、最後の記述のあるページを開く。

「どうぞ」

「……用意がいいな」

クロノが差し出してきたペンを受け取る。

この精霊の言うことを信じる気になったわけではない。

ただ、この非常事態。他にできることがないなら、駄目元で試してみてもいいのではないだろうか。

それは、ちょっとした気の迷いか。

あるいは……。

王国歴435年04月、ロロノ川が氾濫。しかし、溢(あふ)れた水はカイラ山脈から南の丘陵地帯を通り、各支流へ流れ込んだ。奇跡的に、氾濫による被害は発生しなかった。

アルトが書き込んだ文章は、光を放ち、そのあと、それ以前に記されていた文章と同じような褪せたインクの色に変わって定着した。

まるで、その書き込みが、歴史的事実として認められた、と主張するように。

クロノが、アルトの後ろから、歴史書を覗(のぞ)き込

んで言ってくる。

「にひひ、これで一安心ですね！」

「そんなわけないだろ。本当にこれが実現したかどうかなんてまだわからない。逃げる準備はしておく」

「そうなんですか？　心配性ですねぇ」

「人ごとみたいに言うな。お前も手伝え」

「えー！　精霊づかいが荒いですよ、ご主人！」

――数日後。

アルトは上流の村からの報告で、川の増水がどんな被害を及ぼすこともなく収まったことを知る。

歴史書への書き込みは実現したのだった。

〈未来の歴史書〉ルール

前提１：歴史書には未来を司る女神スクルドの霊力が込められている。

前提２：歴史書には、召喚者が召喚した時点までの歴史が書かれている。そこから先の記述は、現実の歴史の実現に従って自動的に追加されていく。

前提３：記述が自動的に追加されるより先に歴史

書に書き込みをすると、歴史書の書き換えが起こり、その通りに歴史が変わる。

第2幕　辺境貴族、貧乏領地を治める

王国歴435年04月15日

ランデオン男爵領の屋敷。

その書斎で、アルトが机に向かっていると、ノックもなしに扉が勢いよく開いた。

「どーもぉ、ご主人！　調子はどうですか？」

「……」

そのあまりの騒々しさに閉口していると、現れた〈刻（とき）の精霊〉クロノは、アルトの隣からひょこ

りと顔を突き出して、机上の書類を覗(のぞ)き込んでくる。

「いやぁ、ご主人も熱心ですねぇ。楽したいなんて言っておきながら、しっかり働き者じゃないですか！」

「やらなくていいことをやったほうがいいことの区別くらいはつくの」

ため息混じりに答えるアルトの眼前には、何枚もの便箋や封筒があった。

それらはどれも、近隣の領主や領内の司祭への挨拶(あいさつ)状だった。ランデオン男爵が戦死し、跡を息子が継いだことなど、もうみんな知っているわけだが、こうして本人から知らせなければ、礼を失

することになる。なにかあったときのために、友好関係を結んでおくことは無駄ではないし。

これを送るのにかかる費用は馬鹿（ばか）にならないが、まあ必要経費と思って諦（あきら）めるしかない。

アルトは、最後の封筒に蠟で封をする。

「よし、あとはクララを呼んで――クロノ、なんだその格好？」

「よかったあああ！　ずっとツッコミなしかと思いましたよおおお！」

安堵（あんど）の息を吐いてそう言うクロノは、メイド服を着ていた。

ツッコミなしもなにも、彼女が入室してから今

まで、一度もそちらに視線を向けなかったので気づかなかっただけなのだが、そう言うとまたうるさそうなので黙っておく。

クロノはお盆を片手で掲げるように持って、片脚をあげてポーズをとる。

「暇だったので屋敷をウロウロうろついていたら、クララさんが貸してくれたんですよ！」

「つまり働けって意味だと思うぞ」

「若いメイド用の制服なんですってね。どうです？どうです似合いますご主人？」

「若いメイドっていうのはつまり、下っ端って意味だと思うぞ」

「いやぁこんな素敵な服を用意していただけるなんて。うふふ、やっぱりわたしが可愛(かわい)いからですかね、うふふ」

「わかったからポーズをとるのをやめろ」

アルトは通じない皮肉を諦めてクロノを止める。

彼女がポーズを変えるたびに、盆の上の皿から、クッキーが机に向かって投身自殺してくるのだ。

「ああ、もったいないもったいない！」

「それ、俺用に持ってきてくれたんじゃないの？」

机のクッキーをパクパクと自分の口に運ぶクロノ。相変わらず、精霊としての神秘性のかけらもない。

と、彼女は不意に手を止めて、一冊の本に目を留める。

〈イリスガルド興国記〉。

アルトが彼女からもらった、未来の歴史書だ。

クロノはそれを手にとる。

「おい、汚れるだろ」

「大丈夫ですよ。女神スクルド様のお力があるんですから」

「クッキーの汚れを防いでくれるお力なんてあるのかよ……」

ジト目のアルトをよそに、クロノは歴史書のページをめくる。

先日の、ロロノ川氾濫による被害を防いだ一文の後に、すでに文が書き加えられていた。

王国歴435年04月、ランデオン男爵はロロノ川中流域の治水工事を命じる。住民たちによる工事は、一度の事故もなく成功し、同年09月には完成する。

「中流域っていうのは、ここから少し上流の辺りですよね？」

「そう。流れが急で、その上カーブしている場所が多くて、水が溢(あふ)れやすいんだ」

ロロノ川の氾濫を抑えるには、その流域の治水を行うのがもっとも良いのだが、足場の悪い場所が多く、工事の難所となっていた。その辺りは、橋もろくに架けられないのだ。

しかし、アルトの書き込みによれば、工事は事故もなく成功し、五カ月後には完成することになる。

「といっても、一年持つか持たないか、ってところだけどね。川を完全に鎮めるには、もっと大規模な工事が必要だ」

「すればいいじゃないですか」

「簡単に言うなってのの」

アルトは、あっけらかんと言ってくるクロノを

睨(にら)む。

「クロノ、お前言ってたよね」

「なんですか？　……！　い、いやらしいことしてもいいなんて言ってないですよ！　で、でもご主人がそう望むなら、ちらっちらっ！」

「この本は、歴史書であるからには、好き勝手に書き込めるわけじゃない、ルールがある、そう言ってたな」

メイド服のスカートの裾(すそ)をめくって太ももを見せるクロノを無視して、アルトは言う。

クロノはわざとらしい膨れっ面になりながら頷(うなず)いた。

「……ええ、言いましたよ」
「つまり、この本は書き込む際に、歴史書という体裁を守った記述をしなければいけない。それがルールってことだろう？」
「ええ、その通りです」
クロノは今度は、にっと笑みを浮かべて頷く。表情の忙しい精霊である。
「ついでに言えば、お前はそのルールを『探っていってもらう』と言っていた。つまり、お前はそのルールを教えてはくれないってことだ」
「そうです。わたしは、この歴史書にスクルド様の霊力を送り込む役割しかありません。歴史書の

ルールについて話すことはお認めいただけません
でした。ただし、ご主人がルールを発見した際に、
それが正しいと告げることは可能です」
「それは、ルールは頭に入ってるけど、話そうと
しても話せない、ということか」
「はい。スクルド様のお力で、言葉に制限がかけ
られてますので」
「ま、だろうね。そうじゃないと、お前なら、ち
ょっとおだてれば簡単に口を割りそうだし」
「しっつれいな！　わたしほど口の堅い精霊もな
かなかいないですよ！」
「なんだ、精霊界ってのは、隠し事は一切（いっさい）しない

主義なのか」

「どういう意味ですかぁ！」

憤るクロノをスルーして、アルトは便箋とは違う、厚手の羊皮紙を机の奥から取り出した。

「……なんです、それ？」

「いろいろ書き込みしてみてわかったことをまとめたものだ」

そう、そこには、アルトがまとめた歴史書のルールが書かれている。

一枚目には、この歴史書を召喚した初日に知った事項がまとめてある。

前提１：歴史書には未来を司（つかさど）る女神スクルドの霊力が込められている。

前提２：歴史書には、召喚者が召喚した時点までの歴史が書かれている。そこから先の記述は、現実の歴史の実現に従って自動的に追加されていく。

前提３：記述が自動的に追加されるより先に歴史書に書き込みをすると、歴史書の書き換えが起こり、その通りに歴史が変わる。

「これは、お前が言ったことだから、ルールには該当しないはずだ。よって、前提としてまとめた」

「ふむふむ」
続いて二枚目。

ルール1：歴史書の所有者は、この歴史書に書かれるはずの歴史的事実を「書き換える」ことができる。その際には、
①現実的に起こりうることしか実現しない。
②抽象的な表現は実現しない。

「いくつか、書いても実現しなかったことがある」
アルトは歴史書の表紙を指で叩きながら言う。
「金塊が空から降ってくる、とか、神聖アルスタ

二ア帝国の皇帝が俺に臣従しにくる、なんて記述は実現しなかった。これは魔法の書や予言の書ではなく、あくまで歴史を記した書物だから、歴史的事実として起こりうることしか、実現してくれないわけだ」

「そうですね」

「さらに『ランデオン男爵が大金持ちになる』とか『一生楽して遊び暮らしました』なんて記述も駄目だった。これも歴史書の文章としては失格ってことだろう。つまり、抽象的だったり曖昧（あいまい）だったりすると、実現しない――どうした？」

「いえ……本当に、楽しして楽な人生を手に入れよ

うとしてるなと思いまして」

「なんだよ、お前がそのために使えってよこした本じゃないか。躊躇（ちゅうちょ）なんかしないよ」

アルトは続いて三枚目を取り出す。

ルール２：実現できることが書き込まれた場合はそのまま文字が残り、実現できないことは消える。

「これはさっきの、実現しなかった文章が消えたことから明らかだな」

アルトが文字を書き込んだ際、それらの文章は光を放って消え、ページは白紙に戻ってしまった。

一方、先ほどの治水工事の文章は、最初に書き込んだ文章と同様、光を放ったあとに、褪せたインクになって定着した。

「その通りですけど、んーでも、これってわざわざルールとして書いておくほどのものですかねぇ？」

首をかしげるクロノ。

一緒に身体も傾いて、またクッキーが机に落ちる。

「なに言ってるんだ。かなり重要なルールじゃないか」

「えーそうですかねぇ？」

なおも納得いかない様子のクロノに、アルトは

肩をすくめる。

「ま、いいさ。ともかく、今はこんなところか。どんどん書き込んで確かめてもいいんだけど、あまりやりすぎて、歴史が思わしくない方向に向かってしまっても困るからね――で、話を戻すと」

「はて、なんの話でしたっけ」

「……大規模な治水工事を簡単にはできない、って話だよ」

「おお、そうでしたそうでした！」

呆(あき)れのため息をつきつつ、アルトは続ける。

「あまりに非現実的なこと、歴史の流れ上起こり得ないことは、この本で実現することはできない。

もし大規模な治水工事を成功させたければ、まずそれが可能な資金や人員を手に入れることが必要だし、そのためには、資金や人員をどんなふうに手に入れたかを書かなければいけない。あくまでこれは歴史の流れを変えることができる本であって、書いたことをなんでもかんでも実現してくれる本じゃないってことだ」

「なるほどぉ、大変ですねぇ」

「お前、歴史書のルールは全部知ってるんじゃないのか……」

知ってることと、理解して利用できることは別問題らしい。

「ともかくそんなわけだ。この歴史書は便利だけど、一晩明けたら億万長者、貧乏貴族脱出万歳――とはいかない。ちゃんと考えて使っていかないと」

「ふむふむ、それで、そのための最初の一手はどうするんです？」

「そうだなぁ……」

とアルトは答えあぐねる。

実はまだ、方針は定まっていなかった。

なにしろランデオン男爵領は、辺境な上に貧乏。ないもの尽くしでろくでもない領地だ。

歴史の流れ上可能な形で、どうやれば、ここから成り上がりが可能だろうか――。

「……ん？」

と、思考に沈むアルトの耳に、なにやら騒がしい声が聞こえた。

クロノが窓際へ行き、外を覗き込む。

「なんですかね？　なんか馬に乗った人がたくさん屋敷にやってきますよ」

アルトも窓から見る。彼女の言う通り、土煙を上げて馬が何頭か屋敷に集まってくる。乗っているのは、近隣の村の男たちだ。

玄関からメイドのクララが顔を出す。

男たちは彼女に詰め寄り、焦（あせ）った声で何事か叫んでいる。

盗賊、とか、襲われて、とか、そんな言葉が聞こえた。

「なんだか物騒な話をしてますねぇ」

呑気（のんき）な口調で言うクロノの横で、アルトは盛大にため息をついた。

氾濫の次は盗賊騒ぎ。本当にろくでもない領地である。

○

「うわー、これはひどいですね」

さすがに普段よりトーンの低い声でクロノが言

う。

アルトも重い気分でその光景を眺めていた。

二人は、屋敷から一時間ほどの場所にある小村に来ていた。

否（いな）、元小村というべきだろう。

簡素な木の家はことごとく破壊され、あるいは焼き払われ、そこここでまだ火がくすぶっている。

農地も焼かれ、あるいは大量の馬の足跡で踏みつけられ、収穫は見込めないだろう。

「作物は全部持っていかれてしまいました」

「幸い死人は出ませんでしたが」

アルトの下に集まってきた村人たちは沈んだ様

子で言う。

「誰(だれ)も死ななかったんですか。それはよかったですね！」

「馬鹿、いいわけあるか」

アルトはクロノを睨む。

「盗賊もわかってるんだよ。村の人口が減ると、次に奪う作物が育てられなくなるって。だからあえて殺さないだけだ」

ため息をついて、

「親父殿も、だから無理に抵抗しないようにって伝えてたんだ。それ自体は間違ってないんだけど、そのせいで盗賊は好き勝手に活動するようになっ

てしまった」
「そんなの、とっとと捕まえたらよかったのでは？」
「隠れ家を探すには人手がいる。そんな余裕はこの領地にはない」
「では村を護衛すれば」
「襲われる可能性がある村全部を護衛するには人手がいる。そんな余裕は以下略」
「はぁ……とんでもなく貧乏なんですね」
「こんな時代だからな」
大陸中の国が戦争に明け暮れている。ランデオン領のような小領地の貴族も、臣従している王国

のために参加するしかない。戦争にはお金がかかるのだ。

かといって、王国に従うことをやめれば、領地はさらに無法地帯となってしまうことだろう。王国領の一部だからこそ、隣国から攻められることは免れているのだ。

「まあ、とはいえ親父殿は、ちょっと王国に尽くしすぎだったと思うけどね」

言いながら、アルトはクロノに手を伸ばす。

「え、なんですか？　こんなところで手を繋(つな)いでデートですか？」

「そんなわけあるか……歴史書だよ」

「ああ、はいはい」

クロノは抱えていたズダ袋から黒革張りの本を取り出して、アルトに渡す。

アルトはページを開き、しばし黙考。

そして文章を書き込んだ。

王国歴435年04月16日、ランデオン男爵は部下とともに見回りをし、レド村を襲った盗賊の隠れ家を発見。盗賊たちを一網打尽にする。

文字は光を放ち――そのまま古いインクとなって定着した。

「お、場所の指定はしなくてもいけるのか」
アルトは頷くと、歴史書をクロノに返す。
まずは村人たちに告げる。
「盗賊に関しては近日中に必ずなんとかする。みんなは、ひとまず近隣の、ナダ村とアルカ村とロド村に分かれて避難してくれ」
続いて、村外れで待機していた兵士たちに命じる。
「二人ずつ、避難する村人の護衛についてくれ。残りは俺と一緒に盗賊の隠れ家探しだ。安心していい。当てはある。明日には見つかるよ」
隠れ家探し、と聞いて疲れた顔を見せる兵士たちを励ますように、アルトは告げる。

そのあまりにも自信たっぷりな物言いに、訝しげながらも、反論をする気にはならないようだった。

「じゃ、さっそく出発しようか。クロノ――クロノ！」

焼けた農地の上を飛ぶちょうちょを追いかけていたメイド服姿の精霊をひっつかまえる。

「あ、なんですか、やっと帰るんですか？」

「違うよ、これから盗賊の隠れ家探し。話聞いてろよ」

「ええー！　もう飽きました！」

「お前が来たいって言うから連れてきたんだろ……」

ジタバタと騒ぐクロノを押さえつけるように馬に乗せて出発する。

兵士たちは、その様子を見て、さらに訝しげな顔になってアルトに続いた。

○

王国歴435年04月17日

「あー、疲れましたー！」

「お前はなにもしてないだろ……」

屋敷の書斎に戻ってくるなり、ドテンとソファ

にひっくり返るクロノ。

メイド服のスカートがめくれて、非常にだらしないことになっている。

一方のアルトは、すぐに執務机に向かい、羊皮紙になにやら書き連ねる。そうしながら、独り言のように呟いた。

「しかし、本当に隠れ家はちゃんと見つかったな。まったく当てもなく探索してたのに」

「そのわりにはご主人、兵士の皆さんにはもっともらしいこと言ってたじゃないですか。なんか地形的にうんたらかんたらって」

「そりゃ、なんの根拠もなしに、あんな険しい山

奥の探索なんか、兵士たちも積極的にはしてくれないだろう？」

盗賊に襲われたレド村を出発してから、一晩野営をして翌日、アルトたちは山地の一角で無事盗賊の隠れ家を見つけることに成功した。

確かにアルトが語った根拠は筋が通ってはいたが、それに該当する場所など、あの近くには無数にある。発見できたのは、あの歴史書のおかげだ。

盗賊の方も、まさか発見されるとは思っていなかったようで、アルトたちの奇襲にまるで対応できず、あっという間に全員捕らえられた。

「ともあれ、盗賊狩りはこれからも定期的に行っ

ていく。歴史書のおかげで捜索に手間がかからなくなるなら、人手はそこまでたくさんいらないからな」

そうすれば盗賊の数は減るし、楽に仕事ができないとわかれば新たに他所からやってくることもない。盗賊の襲撃が減れば、農村の生活も、少しは安定するだろう。

「ついでに、領民からのご主人の評価もアップ、ってわけですね！」

「そういうこと」

アルトはニヤリと笑みを浮かべる。

先代の頃に比べて明らかに治安が良くなったと

なれば、住んでいる人々にとってアルトの印象は良くなる。

領民からの好感度は高いにこしたことはない。

「けどなぁ、んー」

なんだか不満そうに唸るクロノ。

「なんだよ」

「なんかこう、地味というか、退屈というか、もっと派手にパーッと、すごいところ見せてほしいというか……」

「領主の仕事は大道芸じゃないんだぞ」

呆れつつも、アルトはしかし、またしても笑みを浮かべた。

「けど、俺も同意見だ」
「え？」
「そろそろ、本格的に、この歴史書を使わせてもらう」

〈未来の歴史書〉ルール

1：歴史書の所有者は、この歴史書に書かれるはずの歴史的事実を「書き換える」ことができる。
その際には、
①現実的に起こりうることしか実現しない。
②抽象的な表現は実現しない。

２：実現できることが書き込まれた場合はそのまま文字が残り、実現できないことは消える。

第3幕　辺境貴族、子爵領を救援する

王国歴435年04月25日

「ああー、疲れたー！」

エレオノーラ・アグニェッタは、自室に戻るなりヒールの高い靴を脱ぎ捨ててベッドに飛び込んだ。

レモン色のドレスがしわになるのもお構いなしである。

彼女の着替えを手伝うべくついてきたメイドの

イレーヌが苦笑しながら言う。

「エレナ様、お疲れ様でした。どうでしたか、クロイセラー子爵様とのお見合いは？」

「どうもこうもないわよ。あのエロオヤジ、ずーっと私の手をベタベタベタベタ触ってくるのよ？　初対面よ初対面？　ありえないわ」

「それはまた……」

「何度抓りあげてやろうと思ったか知れないわ。けど、ちゃんとこらえたのよ。偉くない、私？」

「それが普通かと……以前、ロスプット伯爵に蹴りを喰らわせたときに、どれほどの騒ぎになったかお忘れですか？」

「あれはあのタヌキオヤジがお尻を触ってきたからでしょう!?　不可抗力よ。人に自然と備わっている防衛本能なの、仕方ないの」

「とはいえ、あのときには、旦那様はさぞ大変だったでしょう。何度も謝罪に伺われてましたし……」

「う……あんなエロオヤジを私とお見合いさせるのが悪いのよ。今日の奴だってそう。そもそも年齢差ありすぎだから。無理だから」

「それこそ、貴族の結婚ではそれが普通ではないかと……」

「わかってるわよ、わかってるけど……」

と、そのまましりすぼみに口を閉じて、エレナはベッドに顔を埋めた。無意識に、ハンカチを取り出して握りしめる。

言われるまでもなくわかっている。

アグニェッタ子爵家。

中堅貴族の娘に生まれた自分には、政略結婚によって領地の安定や有力貴族との繋がりを得る役割がある。それは理解している。つもりだ。

否、あるいは、まるでわかっていないのかもしれない。

わかりたくないのだ。

だって、わかってしまったら、自分の胸の中に

ある本当の想(おも)いの行き場が、どこにもなくなってしまうから……。

と、疲労した頭で答えのない思考をしていると、部屋の扉がノックされた。

「お嬢様」

外から、使用人が言ってくる。

「アルト・ランデオン男爵がお越しになりました」

「！」

バッ！　と。驚くべき速度でエレナは立ち上がった。

その顔には満面の笑みが浮かび、先ほどまでの疲労も不満も綺麗(きれい)さっぱり消え去っている。

その態度が、彼女の、訪問者であるアルト・ランデオンに抱いている感情を、如実に物語っていた。

○

「だーかーらー」

アルトは何度めになるかわからない説明を、もう一度試みる。

「俺の親父殿の妹がアグニェッタ子爵に嫁いだの。エレオノーラはその娘」

「えーとご主人の妹が嫁いでその子供だから……つまりご主人の姪！」

「違う！　いとこ！」
うむむむ、とクロノは頭を抱える。
「貴族の親族関係は、相変わらず複雑です」
「そこいらの農民でも、これくらいの関係はあるってのの……」
まったく、この精霊のポンコツ加減には呆(あき)れるしかない。
ポンコツ精霊は、揺れる馬車の窓から外を見る。
「それで、そのアグレッサ領とやらにはいつ頃到着するんです？」
「アグニェッタ」
「アヒレッシャ」

「アグニェッタ！」
「アヒージョ！」
「原型とどめてないじゃないか！」
こいつを連れてきたのは間違いだったかもしれない。子爵に粗相をしなければいいが。
アルトは後悔のため息をつきつつ、クロノの質問に答える。
「もうすぐつくよ。少なくとも今日中」
「ああー、よかったです。いいかげん飽きてきてたんですよ。旅行といえば聞こえはいいですけど、ここまで四泊とも野宿だし、馬車は狭いしボロいし揺れるし……」

「古い馬車で悪かったな」

これでもランデオン家に三台あるうちの一番立派な馬車だ。ちなみに残り二台のうち一台は作物を運ぶ屋根なし馬車で、もう一台は車輪が壊れているので物置代わりに使っている。

「お、見えてきたぞ」

「え、どれですどれです――おお！」

クロノは、立ち並ぶ樹々の隙間（すきま）から姿を現した、赤い屋根に白壁の、アグニェッタ家の屋敷を目にして、喜色を浮かべた。

「ランデオン家の百倍くらい立派ですね！」

「余計なお世話だ！」

とはいえ、クロノの言葉は事実だ。
アグニェッタ子爵領は、ランデオン家の百倍近くの土地を有しており、その財力の差は屋敷の姿に如実に表れている。
だからこそ、アルトはここへ来たのだ。

○

「アルト！」
「やあ、エレナ、久しぶり」
アルトたちを出迎えたのは、子爵の娘――アルトのいとこのエレオノーラだった。

きらびやかな階段を駆け下りてくる彼女は、赤色のドレスを身につけていた。

アルトは知らないことだが、先ほどまで着ていたドレスを脱ぎ捨てて着替えをし、髪も化粧もなにもかも整え直したエレナは、先ほどとはまるで別人のような笑顔で客を出迎えた。確かに、輝くような金色の髪の彼女には、このドレスの方が似合っていた。

先ほど訪問していた客がこの変わりようを目にしたら、大層ショックを受けることだろう。

「アルト、元気だった？　伯父様と伯母様のご葬儀以来だけど、どう？　領主の仕事は？　なにか

困ったりしてない？」

「まあぼちぼちだよ」

やや空回り気味にアルトの心配をするエレナ。

対するアルトはあっさりとした返事だ。

「そ、そう。なにか困ったことがあったらいつでも言ってね。私にできることなら、なんでもするから」

「ありがと。けど、今は、さしあたって特にないかな」

「そ、そう……」

残念そうに口を閉ざすエレナ。

が、気を取り直して言ってくる。

「と、ところでこのドレス、どうかしら？」
「ん？　そうだね、すごく高そう」
「そうじゃなくて！　その、ね？」
なにやらモジモジした様子のいとこに、アルトは首をかしげる。
が、そこでエレナは、ふと視線をアルトから部屋の隅にいるクロノに移した。
彼女は応接室を好き勝手に歩き回り、そこらの棚を開けたり、壺の中を覗（のぞ）き込んだりしている。
どう考えてもメイドの態度ではない。エレナが気になったのも当然だろう。
「おいクロノ。おとなしくしてろ」

「でもご主人。この部屋にある調度品、見たことないくらい立派なんですもん」

「みっともないからやめろ！」

アルトは立ち上がると、クロノの首根っこを掴(つか)んで自分の横に無理やり座らせる。

「あ、あの、アルト。その子、どうしたの？」

その様子を見ていたエレナが不思議そうに問うてきた。

「あー、えっと」

アルトは一瞬考えるが、すぐに答えを返す。

「親父殿と一緒に戦死した従士の娘なんだ。行き場がないんで、メイドとして雇ってるんだけど、

なかなか仕事を覚えなくて困ってる」
「まあわたしの仕事は歴史書にむがもがっ」
余計なことを言いそうになるクロノの口を慌てて塞ぐ。
エレナは難しい顔でその様子を眺めてくる。
「……本当に、ただのメイド？」
「うん」
「……随分親しいみたいだけど」
「本当だって。メイドじゃない奴にメイド服を着せる趣味なんて俺にはないよ」
嘘は言ってない。メイド服を着ているのはクロノの趣味である。

しかしエレナはなおも疑わしそうな表情だ。すでにクロノが精霊だとバレているのではないかと不安になるレベルの疑いぶりだ。

「と、ところでお父上はご不在かい？　折り入ってお話ししたいことがあるんだけど」

「……いま狩りをしに出ているわ。もう少ししたら戻るんじゃないかしら？」

アルトがいっそ話題を変えると、エレナはそう告げる。

しばらくクロノとアルトを交互に眺めていたが、やがて部屋を出ていった。

アルトはホッと息をつく。

それからクロノを睨(にら)んで、

「お前が余計なことを言うから、妙な疑いを持たれたじゃないか」

「いえ、あれはそういうのではないと思いますけど」

「どういう意味？」

首をかしげるアルトの姿に、クロノは初対面のエレナに密(ひそ)かに同情を寄せるのだった。

○

「待たせてすまなかったね」

応接室にて一時間ほど待ったところで、アグニエッタ子爵が狩りから戻ってきた。黒い髪を撫(な)で付(つ)け、髭(ひげ)を綺麗に整えた彼は、洗練されたジェントルマンといった趣である。

子爵は、アルトから見れば叔父に当たる。

アルトの父親の妹が子爵に嫁いだので、血の繋がりはないが、親戚関係ではある。

その妹、つまり子爵の妻はエレナを産んだ際に亡くなった。そこで両家の縁が切れてしまうことも珍しくはないが、子爵はその後もなにかとランデオン家を気にかけてくれていた。

王のためにと戦争に参じるランデオン男爵に、

資金を援助してくれたことも、一度や二度ではない。

アルトは今回、悪くいえば、叔父のその人の良さにつけ込むつもりだった。

「それで、頼みごととはなにかね。アルトくんも領主になったばかりでなにかと入り用だろうから、私にできることなら、なんでも言ってくれ」

「ありがとうございます。それでは……」

もちろんある程度の方便を含むアグニェッタ子爵の言葉に、アルトは訪問の目的を告げる。

「実は、領地の整備のために、人を貸していただきたいのです」

「それは……」

アグニェッタ子爵の表情が一瞬硬くなる。

「（金はくれるのに人は貸してくれないんですか？　案外ケチですね、このおじさん）」

斜め後ろに控えるクロノが小声で言ってくる。

「（余計なこと言うな。黙ってろ）」

「痛ったい!?」

アルトはそんな彼女の脇腹（わきばら）を思い切りつついて黙らせた。

涙目でその場にうずくまるメイドを見て、子爵は目を丸くする。

「だ、大丈夫かね。急病なら医者を」

「いえ、問題ありません。こういう生き物だと思

ってお構いなく」

「ご主人……ひどい……」

クロノを無視して話を再開するアルト。

子爵が渋るのは想定内だった。

土地を治める貴族にとって、領民というのは金より貴重だ。

多くの貴族は、所有する土地から得られる税によって、生活を成り立たせている。これが少なくなれば、戦争に参加することも、豊かな暮らしを送ることもできない。領地の管理も難しくなる。

そして税は、都市であれば交易で得た利益の一部がお金で支払われ、農村であれば作物の一部で

支払われるのが普通だ。

つまり、領民が減れば、その分税収が減る。それも恒常的に減ることになる。

人を貸すというのは、今ある資産の中から援助をするのとはまるで意味合いが異なるのだ。

いくら親戚の頼みとはいえ、子爵が渋るのも仕方のないことだった。

なので、アルトはカードを切る。

「もちろん、ただで、と甘えるわけにはいきません。代わりに、こちらから一つお手伝いしたいことがありまして」

「ほう？　アルトくんが、私をかね？」

子爵は不思議そうな顔をする。

なにしろ領地に百倍の差があるランデオン家とアグニェッタ家だ。普通に考えて、前者が後者にしてやれることなど、ありそうもない。

しかし、アルトは不敵に笑う。

「はい。叔父上は以前おっしゃっていましたね。騎馬民族の襲撃があとをたたなくて困っていると」

「む……」

「この領地を襲う騎馬民族を、もし俺が一掃したら、その警備に割いていた分の人員を、お貸しいただけませんか？」

○

「よしよし、まずは交渉成立、と」

アグニェッタ家の客室に落ち着いて、アルトは一息ついた。

「いやー、すごいですね。客人用の部屋なのに、ご主人の寝室より豪華ですね！」

「そこは気にするな」

しかしクロノの言葉は事実だ。

自家の屋敷のどの椅子（いす）よりも座り心地のいい椅子に腰をおろして、アルトは眼前のテーブルに地図を広げた。

「なんですなんです？」

「この辺りの地図だ」

アグニェッタ子爵に借りたものだった。

領地の地形などの情報は軽々しく他家に見せられるものではないので、全域の地図ではないが、東の国境の様子がはっきりわかる。

「アグニェッタ領の東側は山岳地帯だ。その先の草原で遊牧生活をしている騎馬民族が、ちょくちょく領地に侵入してくる。その経路は三カ所」

アルトは、部屋にあった、飾り物の木彫りの馬を地図の上に並べる。

「北のスルイ街道、中央のルオン街道、南のリズ

街道。どれも交易に必要な道だから、封鎖してしまうわけにもいかない。騎馬民族もそれがわかっているのか、街道で出会う商人は襲わないんだそうだ」

年に数回、騎馬民族は三つの街道のどれかを通って子爵領を襲撃する。

「そのため、子爵はそれぞれの街道に兵を配備しなければいけない。だから一カ所一カ所の兵の数はどうしても少なくせざるを得ず、押し返すので精いっぱい。相手を一掃するまでには、どうしても至らない」

ランデオン家の百倍の領地を持っていても、ア

グニェッタ家も左うちわというわけにはいかない。領地が広ければ、治安の維持や国境の護（まも）りに割く人員は多くなる。戦争の際の、王国からの要求も大きくなる。

「騎馬民族に襲われないように、山岳地帯の近くでは農地を作れないし、街も発展しない。実質無駄な土地が広がってしまっている。子爵にとっては、長年悩みの種なんだ」

「それをご主人がなんとかできちゃうんですか？どうやって？」

「そりゃもちろん――と」

クロノの問いに答えかけたアルトだったが、不

意に立ち上がると、部屋の扉のところまで歩いていき、バッと扉を開いた。

「わ、わ、わ、きゃあ！」

「なにしてるんだ、君は……」

寄りかかっていた扉がいきなり開いたことでバランスを崩し、両手をワタワタさせながら床に倒れたエレナを、アルトは呆れ顔で見下ろした。

エレナは慌てて立ち上がると、取り繕うようにスカートの裾（すそ）を直して、ごまかすように咳払（せきばら）い。

「こほんこほん……その、アルトが騎馬民族を一網打尽にするって聞いて、どうするつもりなんだろうって気になったから」

「そもそもなんでその話を知ってるんだ……」

先ほどアグニェッタ子爵と話していたばかりである。どう考えても、子爵との会話もこっそり立ち聞きしていたに違いない。

「し、心配してるのよ。だって、この前伯父様と伯母様があんなことになったばかりだし、アルトはまだ戦いの経験なんてないでしょう？」

「戦略ゲームで俺が負けたことがないの、知ってるだろ」

二人がまだ幼い頃。

この子爵家に集まった貴族の子供たちの間で、アルトは負けなしだった。

「ちなみにエレナは、いつも『正々堂々勝負！』とか言って単騎で敵陣に突っ込んでいって最下位だったけど」

「あ、あれはゲームでしょ！」

両拳（こぶし）を握って声を上げるエレナ。

「とにかく……不安なの。アルトがいなくなったらって思うと私……」

「エレナ……」

不安げに自分を見つめてくる彼女を、アルトは困り顔で見下ろす。

心配はありがたいが、聞き耳を立てられるのはマズい。

当然のことながら、アルトがやろうとしていることには〈未来の歴史書〉が必須だ。

しかし、今は他の人間にあの本のことは知られたくない。それによってどんな影響が出るのか、まだ想像がつかないからだ。未知の要素はなるべく排除しておきたい。

「……わかった。行動を起こすときは、ちゃんとエレナにも声をかけるから。その代わり、危険だから、こっそりついてきたりはしないで。俺だって、君がいなくなったら悲しいんだから」

「アルト……！」

その言葉に、エレナは目を輝かせる。

それから顔を真っ赤にして、急にもじもじしながら、身を後退させていく。

「そ、そういうことなら……ええ。ごめんなさい。ちょっと、はしたなかったわね、私。その……頑張って、アルト！」

最後にそう叫ぶと、エレナは客室を飛び出していった。

その後ろ姿を見送って、アルトは苦笑して肩をすくめる。

「やれやれ、エレナは昔から変わってないな。なにかというと俺のやることを一緒にやりたがったりして、未だに子供なんだから――どうしたのク

ロノ？」

「さてはご主人ってアホなのでは？」

「は？　なんだよ突然」

アルトは首をかしげるのだった。

○

王国歴435年04月28日

アグニェッタ子爵の屋敷で一晩を過ごしたアルトは、翌日馬車でスルイ街道を目指した。子爵領の東に広がる山岳地帯を通り抜ける街道のうち、

一番北のものである。

「いやぁ、楽ですねぇ。やっぱり高級な馬車は乗り心地がいいです！」

アグニェッタ子爵が用意した馬車には、アルト、エレナ、クロノが乗っていた。

馬車はもう一台あり、そちらには子爵が一人で乗っている。本当はエレナもそちらに乗るはずだったのだが、なぜかアルトたちのほうに乗り込んできたのだった。四人がけの馬車なので手狭さはないが。

二台の馬車を護衛するように、複数の馬が囲って、山の中の道を進んでいた。

「しかし、馬車は快適ですけど、だんだん道が悪くなってきましたねぇ」

と、窓の外を眺めながらクロノが言う。

エレナは肩をすくめながら答える。

「この辺りはもう、騎馬民族の襲撃を受けることがあるから、道をまともに整備できないの」

整備してもすぐに荒らされてしまう、あるいは騎馬民族がより進撃しやすくなるだけ、ということだろう。わざわざ領内を荒らしやすくしても仕方がない。

アルトも窓の外を見てみる。

森の中を進む山道である。岩肌が多いので、切

り開いて農地にするのは難しいかもしれないが、石材と木材の確保地としては適している。ここを利用できないのは悩みの種だろう。

「おっと」

「きゃっ！」

がたんっ、とひときわ激しく馬車が揺れた。

その勢いで、エレナがバランスを崩す。座席から転げ落ちそうになったのを、アルトは慌てて支えた。

「大丈夫？」

「あ、ありがと……」

礼を言おうとして顔をあげたエレナは、アルト

の顔が近すぎて、すぐにうつむいてしまう。

彼女の肩を、アルトの両手がしっかりと押さえている。久しぶりに接した彼の手は、ずいぶんと大きくなったように感じた。

「きゃー！　わたしも転びそうですご主人っ、きゃー！」

突然声を上げるクロノには、アルトはじっとりした視線を向け、

「揺れないように外の柱に縛り付けてやろうか」

「ご主人、そんな趣味が……」

「ねえよ！」

ぽんぽんと軽口を叩き合う二人を、エレナは微

妙な気分で眺めていた。

（仲良すぎじゃないかしら……？）

ここ数日観察していたが、このクロノというメイドは四六時中こんな態度だ。その上、ほとんどの時間、アルトと一緒に行動している。それでいて、すごく有能でアルトの役に立っている、というわけでもなさそうなのだ。アルトが傍（そば）に置きたいから連れて歩いている、というふうにしか見えない。

それはもちろん、クロノが特になにもしていなくても、歴史書に力を供給する役割を果たしているからなのだが、そんなこと知らないエレナは、妙な疑いを持ってしまう。

（やっぱりこの二人……）

と、そんなことを考えているところに、再び大きな揺れが馬車を襲う。

「きゃあ！」

「本当にひどいなぁ。大丈夫、エレナ？」

「ええ……」

アルトはしっかりエレナを心配してくれている。

しかし、その口ぶりは、なんというか、小さい子供に対するみたいな雰囲気だと、エレナは思ってしまう。

（アルトと同じくらい、私だって成長してるんだけど）

エレナは手を伸ばす。

両手を、アルトの腕に絡(から)めて、ぎゅっと身を押し付ける。

「えっと、その……本当に、すごく揺れるから……」

そう言いながら、身体を密着させてみる。自分が成長していることが、これで少しはアルトに伝わるだろうか。

……と思ったら、アルトはのんびりした口調で言ってくる。

「そうだね。やっぱりエレナは、あっちの馬車の方が楽なんじゃない？　大きいから揺れが少ない

と思うよ」

「……」

エレナは、アルトに絡めていた腕をそっと外して、元のように座り直した。それから盛大なため息をつく。

「え、どうしたの？」

「ご主人、それはないですよぉ」

呆れ切った、という顔で首を振るクロノ。

「え、なんなの二人して」

アルトは不思議そうな顔でエレナとクロノを見やるのだった。

○

王国歴435年04月30日

子爵の屋敷を出て二日。
ようやく目的地である砦（とりで）に到着した。
馬車が動きを止めて、御者が窓から言ってくる。
「お疲れ様でした、皆様。到着いたしました」
アルト、エレナ、クロノは馬車から降りた。
そこは山の中腹にある砦だった。
ここから先は樹々が少なくなり、急峻な崖の聳える中を、細い道がうねるように伸びる高山地帯

となる。

騎馬民族は、この崖を、信じられない乗馬技術で駆け下り、襲撃してくるのだ。

「旦那様、お待ちしておりました！　お嬢様も、ますますお美しくなられて」

鎧を身につけた大柄な男が、見た目どおりの大声で彼らを出迎えた。

この砦を任されている騎士のジロンドだ。

アグニェッタ子爵はアルトを紹介してから、騎士に問う。

「それで、集めた兵はどうだ？　混乱はないか？」

「ええ、心配はいりません。さすが子爵様の騎士

たちで。いがみ合いもせずに、持ち場についております」

「いや、それはお前の差配のおかげだよ、ジロンド」

騎士の言葉に、子爵も満足げに頷(うなず)いてそう答える。

しかし、ジロンドは、すぐに怪訝な表情になって言う。声は急に小さくなった。

「……しかし、突然どうしたんですか？　三つの砦の騎士をここに集めるなんて。他の街道の護りは……」

そう。

子爵は、屋敷を出発すると同時に早馬を飛ばし、

三つの街道を護る砦それぞれに伝令を出していた。

曰(いわ)く、ルオン街道とリズ街道を護る砦の騎士は全員、北のスルイ街道の砦に集まること。

そこで、襲撃してくる騎馬民族を一網打尽にする、と。

これまでにないことだった。

「そこに関しては心配いらない。彼のおかげでね」

「ええ。ご安心ください」

アルトが笑みを浮かべて頷く。

子爵の甥にあたるというその若者の、自信満々な態度に、ジロンドはますます怪訝な表情を浮かべた。

○

王国歴435年05月03日

アルトたちが到着した、その翌日には、一番遠い南の砦からも、騎士たちが到着した。

三つの砦の騎士たちは、ジロンドの指示のもと、持ち場を分担し、街道の警備に当たり、山岳地帯の見張りを行った。

その日は、騎馬民族が現れる気配はなかった。

その次の日も。

そのまた次の日も、やはり騎馬民族は現れない。

「大丈夫なんでしょうな」

「ああ……心配するな」

さすがに不安そうに問う配備から三日が経ち、ジロンド。答えるアグニェッタ子爵の声にもわずかに焦燥が混じる。

一方、この状況をもたらした張本人であるアルトはというと、

「ふわ、あああああっ……」

「アルト！　だらけすぎ！」

与えられた砦の一室で、ベッドに寝転がって大欠伸をするアルト。

部屋を覗いたエレナは、そんな彼の姿に思わず声を荒らげる。

「もうっ。ここ数日、ずっとだらだらこの部屋で過ごして、寝てるか食べてるだけじゃない」

「失礼だな。寝てるか食べてるか本を読んでるだよ」

「大して変わらないわよっ」

ダンダンダン、と足音も荒く、彼女はアルトのところまで歩いていく。

「あまり激しく歩くと、砦が崩れるよ」

「そんなに重くないわよー！」

エレナは最後は絶叫というレベルの声を上げた。

確かに言う通り、アルトの手には本が一冊あった。この砦の隊長であるジロンドから借りたものらしい。あの騎士は、外見に似合わず、知的な面もあるのだ。

「でも確かにちょっと退屈してきたな。この砦にある本も、あらかた読んじゃったし……」

「あれ、そういえば、あの子は？　クロノだったっけ」

「ん？　さっき砦を探検するとか言って出ていった。飽きないね、あいつも」

「……」

その気安い口調に、エレナはモヤモヤした気分

になる。

この砦についてからも、あのメイドはアルトと一緒にいることが多い。こうして別々に行動しているのは、実はすごく珍しい。

（それに夜も同じ部屋だし……はっ！）

と、そこでエレナの頭に妙な想像が浮かんでくる。

この狭い部屋に二人きり。それはまさか、そういうことなのではなかろうか。

実際には、アルトがクロノと同じ部屋なのは、砦の部屋をあまり占拠するのが申し訳ないと思ったからなのだが。あと、狭いと言っても、ランデオン家の屋敷のアルトの部屋とそれほど変わらな

いサイズである。

しかし、一度思いついてしまったエレナは、確かめずにはいられなかった。

「ねえ、アルト」

「ん？」

「アルトって、小さな女の子とか、興味あるんだっけ？」

「は？　いや、そういう趣味はないけど」

アルトはあっさりそう答える。

エレナはその態度に、さらに疑わしい気分になった。

もちろんアルトにそんなつもりはないのだが、

疑心暗鬼になったエレナにとっては、どんな態度も怪しく見えてしまう。

「……じゃあ、なんでクロノを連れているの？」

エレナの問いに、アルトは一瞬、なにを言われたのかわからないという顔をした後、すぐに腹を抱えて笑い出した。なんならベッドの上にひっくり返る勢いだ。

「そ、そんなに笑うことないでしょ」

「これに笑わないでいつ笑えばいいんだ」

あー苦しい、と言いながら、涙の浮いた目をこするアルト。

「誰（だれ）があんなちんちくりんに手を出すかってのの。

あいつを連れてきたのは、単に、屋敷においておいたほうが、物を壊したりしそうで不安だったからだよ」

「……」

アルトはそう言うが、エレナは疑いを消せなかった。

ごく自然な受け答えだ。誰もがいまので納得しただろう。

しかしエレナは見逃さない。

アルトが誰かのことを、わざわざ『ちんちくりん』なんて言い方で呼ぶだろうか。

（私のこと、からかうときだって、そんな言い方

しないじゃないっ）

アルトは子供の頃から、誰に対してもしっかり気を使う質だった。それは、逆に言えば、誰に対しても一歩引いて接しているということになるのではないか。

クロノに対してだけは、その一歩を踏み込んでいる。そう思えてしまう。

「そんな……アルトがそんな趣味に……？　私はどうすれば……」

「あの、エレナ？」

突然頭を抱えてブツブツと呟（つぶや）きだしたエレナに、さすがに心配になるアルト。

「安心してアルト！」

「うわっ」

と思えば、突然顔をあげたエレナが、急に接近してくる。

バランスを崩し、二人はそのままベッドの上にひっくり返る。

アルトが仰向(あおむ)けで下に。エレナはその上に覆(おお)いかぶさるように。

アルトは身を起こそうとするが、エレナが動かない。彼女を押しのけないと立ち上がれない状態だった。

「エレナ、どいてくれないかな」

「大丈夫よアルト、まだ間に合う。まだ更生できるわよ。私がきっと更生してあげるから。ほら、ね」

相変わらずブツブツと、まるで自分に言い聞かせるように呟きながら、エレナはするり、と着ているドレスの肩紐（ひも）を外しだした。

「ちょっとエレナなにを……目！　目が怖いよ！」

「だいじょうぶ、だいじょうぶよー」

全然大丈夫じゃない口調で言いながら、エレナはドレスをはだけていく。

白い肩が露（あら）わになる。それは幼い頃に比べれば、ずいぶんと丸みを帯びて見えた。

さらにその下の、二つの膨らみも顔を覗かせる。まだまだ小ぶりな、けれど確かに成長した柔らかそうな曲線。

「……！」

そこまで脱いだところで、エレナは不意に我に返った。

なにをしているのだ。

貴族の令嬢が、男を押し倒して、裸になるなど。

（……いえ、むしろこれはチャンスよ。アルトを更生させて、既成事実も作れる。石一個で鳥を二羽落とせるじゃないっ）

一度思いついたら、そのまま突き進まずにはい

られないエレナである。

「アルト……」

そっと、彼の顔に手を伸ばす。

火が吹き出そうなほど恥ずかしいが、そこは頑張る。

アルトは一体どんな表情をしているのだろう。

そう思い、彼の顔を見ようと思った、その瞬間だ。

――カンカンカンカン！

砦の鐘が鳴り響いた。

『敵襲ー！　敵襲ー！』

続いて、兵士の叫ぶ声が聞こえ、砦はにわかに騒がしくなる。

「っ……」

さすがに敵が攻めてきたと聞いてもこの続きをするほどエレナは惚(ほう)けていない。

慌てて起き上がると、エレナは即座にはだけたドレスを着直した。

アルトもすぐに起き上がると、何事もなかったかのように扉へ向かう。

「さてさて、仕事だ仕事」

面倒くさそうに伸びをして、棚の上においてあった本を手に取ると、アルトはポンポンとエレナ

の頭を撫でるように叩いてから、部屋を出ていった。

後には、顔を真っ赤に染めたエレナが一人残されたのだった。

「あああああああ私なんてことをおおおお！」

恥ずかしさにしばらくベッドを転げ回る。

アルトが持ち出していった本の表紙に、金箔押しで書かれた〈イリスガルド興国記〉というタイトルに彼女が違和感を覚えるのは、だいぶ後になってからだった。

○

自室を出たアルトは、砦をうろちょろしていたクロノと合流した。

「あれ、ご主人。どうしたんです？　顔が赤くないですか」

「ちょっと走ってきた」

「……運動嫌いなご主人が？　珍しいこともあるもんですね」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ」

クロノをジト目で睨みつつ、アルトは手にした歴史書を開く。

そこに書かれた文字が、しっかり定着しているのを確認する。

文面に問題はなし。日付も合っている。

今回は、これまでの書き込みとは規模が違う。

アルトの読みが当たっていれば、のちの多くの歴史書に、一つの転機として記されるであろう事件となる。

さすがのアルトも、胸が高鳴る。

それは不安か、あるいは昂揚か。

混ざり合う感情を呑(の)み込(こ)んで、彼はパタンと歴史書を閉じる。

「さあ、歴史が変わる時だ」

○

アルトとクロノは、砦の一番高い位置にある物見櫓にやってきた。

櫓にはすでに、アグニェッタ子爵とジロンドがいる。

「どうです、首尾は」

アルトの問いに、ジロンドが顎(あご)で山岳地帯を示してみせる。

「うわー、すごいですね！」

クロノが声を上げる。

山岳地帯の急峻な岩肌に、無数の騎馬が、まる

で張り付くように点在している。

騎馬は少しずつ集合し、まさにこの砦へ向かって集まってきていた。

粒のようだった一頭一頭が、塊となり、そして波となって、押し寄せてくる。

「すごい数ですね。千くらいかな」

「そうだな、およそ千二百。例年どおりだ」

「普段なら、追い返すのでやっとだが、今年は違うぞ」

ジロンドが、気色ばんだ声を上げる。

例年と違い、充分な数の兵で、徹底的に戦えるのが嬉(うれ)しいようだ。

「右翼隊と左翼隊は森へ！　中央隊は隊列を崩さず街道を前進！　蛮族どもを迎え打て！」

「「「おおおおおお！」」」

ジロンドの声に、大量の声が返ってくる。

続いて、櫓が震えるような揺れが起こる。砦じゅうの兵が動き出したのだ。

ほどなくして、砦の門から騎兵、弓兵、槍兵の混成部隊が飛び出す。

先日までの訓練に従って、整然と左右正面へ分かれて進軍していく。

一方の騎馬民族たちも、馬の脚を速めたようだった。

急峻な山をありえない速度で駆け下りていた彼らは、勢いそのままに、濁流のように砦へと突っ込んでくる。

「「「「おおおおおおおおおおおお！」」」」

「「「「ああああああああああ！」」」」

互いの喚声が響き合い、蹄の音が混ざり合い、弓が飛び交って、両軍は激突した。

剣戟の音がここまで聞こえてくる。

馬の嘶き、兵の叫び声。

そして――。

「おお、こちらが押しているな」

「はい。この兵力差です。蛮族に一泡吹かせてや

りましょう」

アグニェッタ子爵とジロンドは嬉しそうに言葉を交わす。

アルトとクロノは、それを見ながら、櫓を後にした。

「うまくいきましたね、ご主人」

「まあ、じゃないと俺が子爵にどやされるからね」

どやされるだけで済めばまだいいほうだ。

もしこの砦以外の場所を騎馬民族が攻めていた場合、子爵の土地は、無傷で侵入した彼らによって、めちゃくちゃに荒らされていたのだから。

「それにしても、よく子爵を説得できましたね。いくら甥の言うことでも、子爵にとっては賭けなわけでしょう？」

「ん、そうだな」

クロノの言葉に、アルトは子爵の屋敷でのことを思い出す。

○

――数日前。

アルトは与えられた自室で〈未来の歴史書〉に書き込みを行っていた。

王国歴435年05月03日、騎馬民族は山岳地帯北側のスルイ街道を通ってアグニェッタ子爵領を襲撃しようとしたが、子爵が集めた兵によって返(かえ)り討(う)ちにあう。

そう書いた文字は、光を放って定着した――前半部分だけが。

騎馬民族がスルイ街道を選んで襲撃することは確定したが、そこにアグニェッタ子爵が兵を集めることは確定しなかったのだ。

「どういうことだ……？　子爵はスルイ街道の砦

に兵を集めることはできないのか？」

アルトはクロノを見るが、メイド姿の精霊はニヤニヤと笑みを浮かべているだけ。見てても腹が立つだけで、ヒントを与えてくれそうにない。

仕方なくアルトは考える。

文字が消えた。

ということは、その部分は実現しない、ということだ。

これまで確認したルールでは、現実に起こりえないことと、抽象的な表現の場合は、この歴史書に書き込んでも実現しないことがわかっている。

しかし、今回はそのどちらでもない。

なぜ、子爵は兵を一カ所に集めないのだろう……。

「……そうか」

「なにかわかりましたかぁ？　――あふんっ！」

腹の立つ笑顔で覗き込んでくるクロノのひたいにデコピンしてやりながら、アルトは言う。

「子爵は毎年、兵を三カ所に分けて配置している。それを、今年に限って一カ所に集める理由はない。騎馬民族の場合はもともと選択する可能性のある行動を指定したから文字が残ったが、子爵の場合は選択するはずのない行動を指定したから文字が消えたんだ」

となると、このままでは、なんの意味もない。
騎馬民族がどこに来るかわかっていても、そこに兵を集めるよう子爵を説得できなければなんの意味もない。
「ちゃんと根拠があれば……そのためには……そうか」
「ご主人、なんか思いついたんですか？」
特にもう腹の立つ顔はしていなかったが、覗き込んできたクロノのひたいにデコピンしてから、アルトは立ち上がった。
部屋を飛び出す。
「あ、ちょっとご主人！　なんなんですかぁ！

精霊でも痛いんですよぉ！」

アルトは子爵の執務室へ赴いた。

許可を得て入室すると、これまでの、騎馬民族が攻めてきた際の記録を見せてもらう。

子爵は律義な性格のようで、丁寧な日記をつけていた。騎馬民族がどこから攻めてきたか以外にも、毎日の天候やら、取引の記録についても記されていた。

それをめくっていき、アルトはヒントを探す。

「なるほど……これなら」

「なにかわかったのかね？」

問いかけてくる子爵に、アルトは堂々と頷いてみせる。

「ええ。今年、騎馬民族がどの街道を通って攻めてくるのか、判明しました。兵をそこに集中させれば、奴らを一掃できますよ」

「本当か!?」

目を丸くする子爵。

当然だろう。これまで、それがわからず、彼は頭を悩まされてきたのだから。

しかし、アルトは子爵の日記を卓上に置いて言う。

「叔父上が丁寧に記録をとっていたおかげですよ――書くものをお借りできますか？」

「う、うむ」

信じられない、といった様子で、子爵は紙とペンを差し出す。

アルトはそこに書き込みながら、

「この記録にある、二十年間の、騎馬民族の襲撃箇所です。計、五十八回。時期は五月がもっとも多く、ついで九月。それ以外の時期はほぼありませんね。三カ所の街道のうちどこに現れるかは完全にランダム。法則性はありません――一見」

「一見……？」

「ええ。騎馬民族襲撃の記録だけを見ると、そうなります。ですが、その年の作物の出来を合わせ

ると……」

「！」

アルトが紙に書き込んだ表を見て、子爵は目を丸くする。

子爵領での作物の出来――各地域からの税収でわかる――と並べると、法則性が明らかだった。

「子爵領の北部で豊作の年には、騎馬民族は北のスルイ街道に現れます。同様に中部であれば中央のルオン街道、南であれば南のリズ街道です。これは、山の向こうの草原地帯でも、奴らが馬の食料を求めて、その年に草の多い地域に移動して生活しているからです。相手は単に、一番近い道を

使って襲撃していただけなんですよ」
「なんと……」
息を呑むアグニェッタ子爵。
長年頭を悩ませてきた問題が、これほど簡単な理屈だったとは。
「例外はありません。それを考えると、今年は北の村々が特に豊作のようですね……」
「ということは、奴らはスルイ街道に現れる、ということか」
「その通りです」
アルトは笑みを浮かべて頷いた。
「今年こそ、奴らに一矢報いてやりましょう。焦(あせ)

りますよ、きっと。これまでにない大部隊に反撃されたりなんかしたら――」

○

「なるほど、そうやって子爵を煽（あお）って、兵をここに集めさせたんですね」

現在に戻って、騎馬民族と戦闘中のスルイ街道の砦。

クロノは、アルトの説明に頷いていた。

「煽ったとか言うな。説得したんだよ。まあ、豊作だった土地に関しては、何カ所か嘘ついたけど」

「煽ったどころか詐欺じゃないですか！」

「いいんだよ。騎馬民族がここを攻めることを俺が予測できたってことに説得力があればよかったんだから」

そう。

実は最初から最後まで、アルトには、騎馬民族が三つの街道のうち一つを選ぶ際の法則性などわかっていない。

子爵の日記からそれっぽい記述を見つけて、あとは強引（ごういん）に納得させただけだったのだ。

あのあと、子爵の部屋から戻ったアルトは、歴史書に追加で書き加えた。

アルト・ランデオンの説得によって、アグニェッタ子爵はスルイ街道の砦に兵を集め、騎馬民族を返り討ちにする。

その文章は光を放ち、褪せたインクの色で定着した。

アルトの説得によって、子爵はスルイ街道に兵を集める案を検討（けんとう）することにした。

もしかしたら、直前でその考えを翻（ひるがえ）し、例年どおり三つの砦に兵を分散させることにしたかもしれないが、少なくとも、兵を集める可能性は生ま

れた。

可能性があれば、歴史書に記したことは実現するのだ。

「さてと、次の手はどうしようかな」

「次の手？　騎馬民族を倒して終わりじゃないんですか？」

「それじゃもったいないだろ」

廊下の外れで、邪魔にならないように壁に寄りかかって、アルトは歴史書を開く。

ペンでそこに書き込みを入れる。

騎馬民族はアルト・ランデオンに帰順しランデ

オン領に移り住むことになる。

その文章は、定着することなく、光を放って消えてしまった。

「やっぱりだ。何度か書き込んでるんだけど、うまくいかない」

「それは、騎馬民族が仲間になるわけないってことなんじゃないですか？」

「いや、そうとも限らないんだ」

アルトは窓の外を眺めながら言う。敗走する騎馬民族の兵を追いかける子爵側の兵たちの姿が見えた。

「ランデオン領には、農地にできなくて、ただの草地になっている土地がある。人口が少ないから、土地が余ってるんだ。けど、放牧には適しているから、彼らの居住地には向いている。山の向こうの痩せた土地で生きるよりは、ランデオン領で、畜産物の一部を税として納めて生活する方が楽だと思うんだよ」

「それはご主人の考え方でしょう？　騎馬民族はそんな生活、真っ平御免なのかもしれませんよ？」

「そうかぁ……惜しいなぁ」

この戦いは、ただ子爵が騎馬民族に勝つだけでは意味がない。

その騎馬民族を動かしてこそ、アルトの思惑を完全に実現することができるのだが……。

アルトが名残惜しそうに歴史書の表紙を見ていると、砦の外から喚声が聞こえてきた。

『敵が逃げてくぞ！』『包囲しろ！』『逃すな！　二度と襲撃できないように捕まえろ！』

兵たちの叫びに交じって、

『大将を捕らえたぞ！』

そんな声が聞こえて、アルトは即座に砦を飛び出した。

○

砦の門のすぐ内側。

捕らえられた騎馬民族の兵たちが続々と連れ込まれてくる。彼らの多くは、周りの敵を睨みつけながらも、おとなしく従っていた。馬から下ろされた彼らは、小柄で、むしろ弱々しくさえ見えた。

そんな中ギャーギャーと騒がしい声の聞こえる方にアルトは向かう。クロノもついてきた。

アグニェッタ子爵とジロンド、それに数名の兵士が集まっていた。

「どうしたんです、大将を捕らえたんですか？」

「ああ、アルトくん。それがね……」

と、子爵は地面を指さす。

そこには、数名の兵士に取り押さえられた、

「女？」

「……っ」

アルトの言葉を否定するように無言で睨みつけてくるのは、しかしどう見ても女だった。

他の騎馬民族と同じく、頬に赤い鉤爪のような入れ墨を入れている。革の鎧も身にまとっているので、間違いなく騎兵なのだろうが、年齢はアルトと同じか少し下くらい。まだ少女と言っていい年齢だ。

「どうしてここまで厳しく取り押さえてるんで

す？　暴(あば)れるんですか？」

「違う違う。この場で自害しようとしたから止めてるんだ」

アルトの疑問に、ジロンドがそう答えて、少女の横に落ちている小刀を指さす。

「こいつを捕らえた兵が、女だと思って油断したらしい。思わず逃げられてしまったが、次の瞬間には懐(ふところ)からこれを取り出して喉(のど)に突き立てようとした。それで慌てて取り押さえたんだ」

「なるほど……」

アルトはその場にしゃがみこんで少女の顔を見る。

少女はアルトを睨み返してくる。

「なんで自害なんてしようとしたの？」

「……」

「ひょっとして、君が隊長？　負けた責任を取って死のうとした？」

アルトの言葉に、ジロンドが苦笑を漏(も)らす。

「ははは、アルトくん、それはないだろう。女が隊長など……」

「なぜわかった」

ジロンドの言葉を遮(さえぎ)って、騎馬民族の少女が言った。ジロンドも、他の兵士たちも、驚きに目を丸くする。

「よかった、言葉は通じるんだ」
一方アルトは笑みを浮かべ、
「君の入れ墨が他の兵士より立派だから」
「……」
少女の表情が変わった。完全な敵対だったのが、警戒とわずかな興味が表れる。
「君の名前は？」
「シャグナだ」
「なぜシャグナが隊長なの？　人手不足なの？」
「違う。私は、村で一番、馬が速くて、強い。だから隊長になった」
少しずつアルトの質問に答えていくシャグナ。

大陸語が得意でないのか、相手への警戒ゆえか、あるいは元々そういう性格なのか、かなりそっけない口調だ。

「それにしても、君みたいな女の子に指揮を執らせるなんてどうかしてる」

「グレナ族は皆、大地の子。強ければ、隊長に選ばれる。男も女も、大人も子供も関係ない」

「ふぅん……」

そのあたりは文化の違いということだろうか。

「ねえシャグナ。君は責任を取って死んだらそれで終わりだけど、捕まったみんなはどうなるの？」

「それは……」

「それよりは、これからのみんなの処遇が、少しでも良くなるように努める。それが隊長のやるべきことなんじゃない？」

「……」

アルトの言葉に納得したかどうかはわからないが、シャグナは、力なくうなだれた。

兵士が彼女を連れていく。

アルトは、シャグナが持っていた小刀を拾う。柄に細かい細工の入った綺麗な品だ。彼女にとっては、大切なものなのかもしれない。

「叔父上、ジロンドさん。彼らの扱いは普通の捕虜と同様にしてくれますか。くれぐれも、乱暴に

扱ったりしないように。そして、身柄を俺に預けてほしいんですが」

「まあ、それは構わないが」

「労働力にも使いようがないだろうしな」

子爵とジロンドは顔を見合わせてから、不思議そうな顔でアルトを見た。

○

その後。

隊長であるシャグナが捕まったことで、騎馬民族たちは自分たちの敗北を認めたようだった。多

くの兵が降参して捕らえられ、一部は逃げ去っていった。

夜までには、戦いは完全に終結した。

そして、

「ご主人の悪巧みは大成功しましたけど、どうするんです？　騎馬民族を預かるなんて言っちゃって。彼ら、降伏はしないわけでしょう？」

与えられた一室で、クロノはアルトに問う。

一方アルトは机に向かい、歴史書を開く。

「いや、そんなことはないと思う」

アルトは、昼間の少女の態度を思い出す。

彼の言葉ですぐに自害を思いとどまった。それに、

彼女にとっては、ほとんど交流がないはずの異国の言葉である大陸語を、会話可能な程度に習得していた。頭のいい少女なのだ。

だとすれば、交渉の余地はある。

そして、交渉の余地があるならば、〈未来の歴史書〉で実現させることができる。

騎馬民族はアルト・ランデオンに帰順しランデオン領に移り住むことになる。

アルトが前とまったく同じ文章を書くと、やはり光を放って消えてしまった。

「ほらー、やっぱり駄目じゃないですか」
「違う。これは検証用に書いたんだ」
アルトは、もう一度、今度は別の文章を書く。

シャグナ率いるグレナ族はアルト・ランデオンに帰順しランデオン領に移り住むことになる。

今度は文字は消えることなく定着した。
「やっぱりか」
アルトは満足げに頷いた。
「どういうことです？」
「同じ条件で『騎馬民族』と書いた場合は文字が

消えたけど、具体的に『グレナ族』と書いたら消えなかった。俺たちは、この砦に攻めてきた彼らを騎馬民族と認識していたけど、当然、騎馬民族はまだ他にもいる。客観的に見れば、最初の文章は『騎馬民族全体がランデオン領に移り住む』という記述に読めてしまう。歴史書の記述としては、それじゃ認められない。書くのは個人名や種族名など、具体的なものでなければいけないってことだ」

「ふむふむ」

クロノが笑みを浮かべて頷いている。

どうやら、この推察は正解らしい。

これもルールとして加えておく必要がありそうだ。

「よし……なんとかなったな。これで、歴史は大きく変わるはずだ」

アルトは、ようやく肩の荷が下りた、といった様子で言った。

そう、これが彼の狙いだった。

騎馬民族を倒し、アグニェッタ子爵領を助けると同時に、騎馬民族をランデオン領に帰属させる。

それが、のちのち大きな効果をもたらすことになると、アルトは考えているのだ。それこそ、歴史を大変動させるような効果を。

「ん？　……なんだっ!?」

突然、歴史書が光を放った。

アルトは危うく本を取り落としそうになる。

文字が定着するときの光より数倍まばゆい輝きが、本を包み込み、やがて消えた。

「なんだったんだ……」

アルトは本を見る。そこには新たに文章が加えられていた。

アルト・ランデオンの説得によって、アグニェッタ子爵はスルイ街道の砦に兵を集め、騎馬民族を返り討ちにする。若き女族長であるシャグナが

率いるこの一団はグレナ族と呼ばれるが、彼らはアルト・ランデオンに帰順し、以降ランデオン領にて放牧生活を行うこととなる。この戦いを『スルイ砦の戦い』と呼ぶ。

今回の戦いに関する、アルトの書き込みが消え、代わりにこんな長文が現れていた。

「なるほどな」

「どうしたんです？」

納得したように呟くアルトに、クロノが言ってくる。

「歴史上の転機になるような重要な出来事には、

後世になって名前が付けられるだろ。今回の出来事も、そういうものになるってこの歴史書が認めたんだろうな」

それで書き込みが自動的に書き換わり、『スルイ砦の戦い』という歴史的名称が新たに加えられたのだ。

アルトの読みは、当たっていたことになる。

「これも歴史書のルールに加えておくか」

このルールはかなりありがたい。行動の指針として大いに利用できるだろう。

「ともあれ、これで、叔父上から借りられる人員に加えて、グレナ族を帰順させられた。人手が増

えたわけだ」

「それで、増えた人手でなにをするんです？」

クロノの問いに、アルトは答えず笑みを浮かべる。

しかし、彼の頭の中では、すでに次の計画が回り始めている様子だった。

○

と、アルトとクロノが会話をしている部屋の外。

廊下で、こっそり聞き耳を立てていたエレナが、こっそり立ち去っていった。

別に初めからそうしようと思ったわけではない。

ただ、アルトに会いにきたら、クロノとの会話が聞こえて、思わず……というわけだ。

なにしろそこには、奇妙な言葉が並んでいた。

「歴史上の転機？　歴史書のルール？　なんのこと？」

自分用に与えられた寝室に戻って、エレナは考え込む。

どうやら、アルトの部屋にあった〈イリスガルド興国記〉と関係がありそうだ。

けれど、どう結びつくのか、彼女にはさっぱりわからなかった。

「アルト……いったいなにをしているの？」

エレナは、不安を打ち消すように、ぎゅむりと枕（まくら）を押しつぶした。

〈未来の歴史書〉ルール

3：ある人物の行動を指定する場合には、その人物が取りうる可能性のある行動でなければいけない。

4：行動の指定には、歴史書の記述として認められる、客観的な人名、種族名などが必要である。

５：歴史書への書き込みによって、歴史上の転機となる出来事が発生した場合には、記述が書き換わり、後世に付けられる歴史的名称が加えられる。

第４幕　辺境貴族、改革を進める

王国歴４３５年06月15日

「なんとか形になってきたな」

アルトは、高台から、草原に点在するテントのような家を眺めながら呟いた。

ランデオン家の屋敷にほど近い草地である。

近くに村がないため、農地として開拓もされず、荒れ放題の土地だったのだが、生えている草は放牧に向いているものだった。

そこで、アグニェッタ子爵領から連れてきた騎馬民族たちを、アルトはここに住まわせることにした。

シャグナが指名した数人に、スルイ街道の砦（とりで）の戦闘で逃走した者や、山の向こうに残っていたグレナ族を迎えに行かせ、ここに移住させた。

グレナ族は移動用の、折りたたみ式の家で生活していたため、引越しはそれほど大変ではなかった。

そうして、なんやかんやで一カ月。

グレナ族はランデオン領に定住しつつあった。

「今のところ、周りの村から苦情が出たりもしてないし、うまくやっていけそうかな」

「当然だ。我ら大地の子は約束を守る」

以前より少し流暢(りゅうちょう)になった大陸語でそう答えるシャグナ。

戦闘のときの鎧姿と違い、前を合わせた布を太めの帯で巻いた、独特の民族衣装を着た彼女だが、身にまとった鋭い雰囲気は変わっていない。

彼女たちグレナ族にランデオン領に馴染(なじ)んでもらうため、アルトは彼らが作る乳製品を、近くの村の小麦と交換する仲介を行っていた。

思いの外、両者は簡単に打ち解けた。今は一緒に酒を飲む程度だが、いずれ、婚姻関係も生まれるだろう。その頃(ころ)にはまた新たな問題も発生して

いるだろうが、少しずつ調整していきたい。それも〈未来の歴史書〉があれば難しいことではないだろう。

と。

グレナ族の村のほうから、なにやら歓声が聞こえた。中央にある、ひときわ大きなテントからである。

「なんだか楽しそうですねぇ」

メイド服姿の精霊、クロノが言う。彼女は相変わらず、歴史書を入れたズダ袋を背負っていた。

シャグナが答える。

「この土地の精霊への挨拶だ。皆で乳酒を飲む。

アルトたちも来るか？」
「にゅーしゅってなんです？」
「馬の乳から作る酒だね。確か、ちょっと酸味がある、変わった酒だって話だ」
「美味しそう！　気になります、ご主人！」
「精霊って酒飲めるの……？」
そういえば、食べ物は普通に食べている。飲食は普通の人間並みにできるのだろう。
「では来い」
そう言ってアルトを見るシャグナの視線からは、以前のような敵意はすっかり消えていた。
「それじゃ、お呼ばれしようかな」

と、クロノとシャグナと連れ立って、テントへ向かおうとしたそのときだ。

「こらーーーーー！」

そんな声とともに、背後の林から馬が飛び出して来て、アルトたちの進路を塞(ふさ)いだ。

「屋敷にいないと思ったら、またこんなところに……っ！」

「やあ、エレナ。どうしたんだい？」

馬の鞍の上から自分を睨(にら)んでくるエレナに、アルトは軽く挨拶する。

エレナは、紫色のドレスの裾(すそ)を翻(ひるがえ)して馬から飛び下りると、アルトに詰め寄って、

「どうしたんだい、じゃないわよ！　どうしていつもいつも私を置いてくの！　わざと!?　わざとなのね!?」

「違うって。たまたまだよ。たまたま声をかけようとしたら君が見当たらなかったり、お風呂に入ってたりするものだから」

「嘘よー！」

もちろん嘘である。

一カ月前。アグニェッタ領から、シャグナたちグレナ族を引き連れてランデオン領へ戻るとき、なぜかエレナもアルトたちについてきた。

曰く、

『楽することばかり考えていたアルトが、急に領地経営に乗り気になって、大ポカやらかさないか心配だからしばらく観察する』

とのことだった。

アルトは、

『領主になったんだから、領地経営くらいするよ』

と答えたのだが、これまでの行いが祟ったのか、まるで信用されなかった。いとこはよく見ているものである。

そんなわけでしばらくランデオン家の屋敷に滞在しているエレナだが、アルトにとっては都合の悪いこともある。

もちろん〈未来の歴史書〉の存在である。

たとえいとこでも、この本のことを知られるのはマズい。どんな影響があるか想像もつかない。

エレナは、九月には、どこぞの貴族が開くパーティに呼ばれているとかで、出かけなければならない。なんとか、それまで歴史書のことは、隠し通したい。

しかし、滞在一カ月にして、すでに無理が出てきていた。

実際、エレナはこうして馬を駆ってアルトを追いかけてくるのだ。

「まあまあ、それより、シャグナたちが今乳酒で

引越し祝いをしているそうなんだ。エレナも来ないかい？」

「乳酒？　いえ、私はちょっと……」

お酒が苦手らしいエレナは言葉を濁す。

「そう？　ランデオン領の新しい領民たちと良好な関係を築くためにも、俺の親戚であるエレナにも協力してほしいんだけどなー」

「う……」

「エレナさんもいきましょうよう。タダ酒ですよタダ酒！　飲み放題！」

「べつにお酒をそれほど飲みたいわけでは……」

「お前は酒を飲めないのか？　この国の貴族の娘

は軟弱だな」

「むっ……！」

シャグナに煽(あお)るような口調で言われ、エレナの表情が変わる。

「そんなことないわよっ。いいわ、乳酒でも蜂蜜酒でもいくらでも飲んでやるわよ。あとから足りなくなったなんて言わないでよね」

「望むところだ。酔い潰(つぶ)してやる」

「それはこっちのセリフよ！」

バチバチバチ、と火花が散りそうな視線を交わしながら、エレナとシャグナはテントへ向かっていく。

「ふう、助かった」
追及を逃れたアルトは安堵(あんど)の息を漏(も)らす。
「けど、大丈夫ですかね、あの二人？」
「お前も煽っといてなに言ってんだよ――まあ、大丈夫でしょ。騒ぎになりそうだったら、止めて立ち去ればいいんだし」
そう言いながら、アルトとクロノもテントに向かった。

○

「エレナ、しっかりして」

「うう……うー」

アルトの言葉にも、彼女はまともな言葉を返せない。

あれから三時間、乳酒を飲み続けたエレナは、完全に酔いつぶれてしまっていた。

足取りもおぼつかない彼女を、アルトは背中に抱えて屋敷へ向かっているところである。

ちなみにクロノはまだシャグナと一緒に飲みながら、高笑いしていた。あの二人はあの二人でどうかしている。ああいうのをウワバミと言うのだろう。

アルトの背中におぶさったエレナは、思いの外

軽い。

いつの間にか、二人の間に、しっかりと体格差が生まれていることにアルトは気づいた。

「アルトぉー！」

突然、エレナが名前を呼んできた。

「はいはい、なんですか姫」

まともな返事は期待できないので、適当に言葉を返すアルト。

しかし、エレナは、

「ひめー？　わたし、ひめー、えへへ」

そう言って、デレデレと笑い声を上げる。

アルトは苦笑した。

そういえば、子供の頃、貴族の子女たち何人かでやった戦争ごっこの際には、囚(とら)われた姫のエレナを助け出す、という設定のものもあった。今考えると、なんとロマンチックな戦争だろう。それに比べて実際の戦争の理由は、金、権力、そればかりだ。世知辛い。

まあその戦争ごっこの際には、退屈して牢屋を飛び出した姫が暴(あば)れ回り、最終的に勝利を収めるという結果に終わったのだが。

「アルトー」

「ん？」

「わたし、ひめだからー、アルトとけっこんして

あげるからね」

「……」

酔った口調のまま、そんなことを言ってくるエレナ。

アルトは、思い出す。

姫が無双して勝利した戦争ごっこ。

彼女は、最後まで自分と張り合ったアルトに、同じことを言ったのだ。

二人が結婚すれば、その国は最強だから、と。

思わず、その可能性を考えてしまうアルト。

しかし、すぐに首を振った。

本気にするようなことではない。普段の彼女の

態度と同じで、所詮(しょせん)は子供の頃の思い出を引きずってしまっているだけだ。

「光栄の至りです、姫」

アルトは苦笑したまま、そう答えておくのだった。

○

王国歴435年06月28日

「アルト、出かけるの？」

アルトがクロノとともに屋敷の玄関を出ると、エレナが立っていた。

「……うん」

「そう。じゃあ行きましょ」

頷（うなず）くアルトに、笑顔でニッコリ言ってくるエレナ。

三人は馬車に乗り込んで出発した。

ここ数日、ずっとこうだった。エレナは、アルトの行動パターンの裏をついて、毎回外で待ち伏せている。そして必ずアルトの外出に同行してくるのだ。

普段なら、べつになにも困らない。いくらでもついてきてくれて構わない。

ただ〈未来の歴史書〉のことを知られたくないので、そこが困るのだった。

「ねえ、エレナ。このボロ馬車、乗るの疲れない？大丈夫？」

「ええ、もう慣れたわ」

「そう……」

ガコガコと揺さぶられながら、平然とそう答えるエレナ。

「それより、今日はどこに向かってるの？」

「ええと、領地の視察だよ」

「また？」

エレナは訝しげな表情で首をかしげる。

「そりゃ、領主になりたてなんだから、自分の領地をきちんと見ておかないとね」

「それはそうだろうけど……」

彼女が不審に感じるのも無理はない。

なにしろ、エレナがついてきたアルトの外出、そのほとんどは『領地の視察』と称して、近隣の山を散策しているだけだったからだ。

視察というなら、普通は街や村を訪れるものだが、その比率は一割程度。残りの外出は、アルトはずっと山歩きをしていた。

「特に山でとれるものがあるわけでもないでしょう？　一体山のなにを調べてるの？」

「なにがあるかを調べてるんだよ」

エレナの問いに、はぐらかすような答えを返す

アルト。

エレナは納得がいかない。

と、不意に馬車が止まった。

アルトとクロノに続いて降りようとするエレナに、アルトが言ってくる。

「どうしてもついてくるの？」

「え？　なんで今日に限ってそんなに訊いてくるのよ」

「いや、だって……」

と、アルトは気まずそうな顔をして、目の前の建物を指さす。

そこは、この辺りではそこそこ大きい街、ロブ

ソン市の裏通りだった。馬車一台がなんとか通り抜けられる狭い道。そこにひっそりと入口を構える店。

どう見ても娼館である。

「なっ……!?」

予想外すぎる目的地にエレナは思わず固まる。

エレナの中では、アルトのだらけた姿と、こういう場所とがまるで結びついていなかった。

なんとなく、アルトはこういうことに興味がないような気がしていた。

しかし、アルトだって男だ。そういう欲求は当然あるだろう。

「どうする？　ついてくる？　けっこう時間かかると思うけど……」

「っ……！」

駄目押しのようにそんなことを言われて、エレナは限界だった。

「い、いいわよ！　たっぷり楽しんでくればいいじゃない！　バカ！　アルトのすけべ！」

そう叫んで、馬車のドアを乱暴に閉じる。

なにも言わずとも、馬車はランデオン家に向かって引き返すのだった。

○

「ふう、よかった……」

エレナを乗せた馬車が走り去るのを尻目(しりめ)に、アルトとクロノは娼館に入り――そのまま反対の玄関から出て、用意しておいた別の馬車に乗り込んだ。

屋敷で荷物置きになっていたのを修理したものだ。

馬車は街を離れ、近くの山道を上っていく。

やがて、中腹に至った辺りで、アルトは馬車を止めた。

御者を待たせておいて、アルトは山へ分け入っていく。

彼の後についてくるクロノが、辺りを見回しな

がら訊いてくる。

「けど、エレナさんじゃないですけど、本当にこんなところ見回ってどうするんです？　それに、どうして今日に限ってエレナさんを置いていったんです？」

「今日は本番だからね。見られるとマズい」

「本番……？　なんですか、いやらしい話ですか？　ああ！　こんな山の中でわたしの貞操は失われるのですねっ！」

「違うっての！　歴史書出して」

「はいはい」

アルトの要求に、慣れた様子でズダ袋から本を

取り出すクロノ。

アルトはそれを受け取って、ページを開く。

その最新の書き込みは、こう記されていた。

王国歴435年06月28日、アルト・ランデオンは領地の視察中に金鉱脈を発見する。

「金！　マジですか！」

その文章を読んで、クロノは目を丸くする。

「ああ。隣のクロイツ伯爵領では、わずかだけど金が産出されて潤っている。ランデオン領にも鉱脈はあるだろうと言われてたんだけど、なにしろ、

探索に必要な元手も人手もなかったからね。親父殿は完全に諦(あきら)めていた。というか、そういう博打(ばくち)みたいなことは嫌いな人だったから」

けど、とアルトは歴史書を軽く叩きながら、

「これがあれば探索にかかる時間は大幅に短縮できる。なにしろこんなふうに、偶然発見できるわけだからね」

とはいえ、実は、一発で発見できるようになったわけではない。

ここ数日、ランダムに山の視察をしながら、その日の夜にアルトは、翌日に金鉱脈を発見する、という文章を書き続けていた。

しかし、何度も、書いた文章は光を放って消えてしまった。

「それが昨日の書き込みでようやく定着した。これは、いろいろな場所に足を運ぶことで、俺の頭の中に、鉱脈のある場所に足を運ぶ可能性が思い浮かぶようになったからだろうな」

≪ある人物の行動を指定する場合には、その人物が取りうる可能性のある行動でなければいけない≫

このルールに従えば、アルトがこの場所を思いつく可能性が生まれて初めて、鉱脈発見の記述は実現可能となるというわけだ。

ここ数日のアルトは、その可能性を導き出すた

めに行動していたのである。

「はぁ～、意外です」

「ん、なにが？」

「ご主人がそんな面倒くさいことをするとは思いませんでした。楽したいって言ってましたし」

「なんか誤解があるみたいだな……」

アルトはジト目でクロノを見ながら言う。

「前にも言ったけど、俺が楽したいってのは、やらなくていいことまでやりたくないってことだから。大きな利益（りえき）が得られるなら、多少の労力は惜しまない」

「でも、こうやって山を歩き回っても、金が見つ

からない可能性もあったんですよね」
「まあね。けど、領地をあちこち見回るのは、他の目的もあったから」
「他の目的？　なんです？」
「それはそのうち。お、あの辺り、なにかありそうだな。ひょっとして金が埋まってるんじゃないかな～」
弾んだ口調で言いながら、アルトは崖の下にぽっかりと空いた洞窟（どうくつ）に向かう。
クロノは肩をすくめながら彼に続いた。

○

王国歴435年08月12日

「いやぁ、まさかここまで大当たりだとは思わなかったな」

以前とまるで様変わりした山の景色を眺めながら、アルトは言った。

二カ月ほど前、アルトが金鉱脈を発見したその土地は、今では大鉱山と化していた。

いくつもの坑道が掘られて、やぐらを組んだ入口が見える。多くの坑夫がそこを行き来して産出物を運び出していく。

品は、整備された道を通って、ロブソン市の郊外に建てられた精錬所に運ばれる。

ロブソン市は、坑夫や、金産出の噂（うわさ）を聞きつけた商人たちで賑（にぎ）わい、かつてない活況を呈していた。

「このために、アグニェッタ子爵から、人手を借りたんですね？」

「そういうこと。いくら金鉱脈を発見しても、発掘できなきゃ意味がないからね」

アルトは頷く。

ちなみに、坑夫の中には騎馬民族の者も時折交ざっている。ランデオン領に移住したことで生活に余裕ができ、時間を持て余している者がいたので、

声をかけたのだ。

小柄だが体力のある彼らは、坑夫としては重宝されているようだった。

「まあ、ここまでくれば、あとは他の土地から、雇ってほしい者がどんどんやってくる。叔父上に人を返してもやっていける」

「でも、そうすると今度は人が余りませんか？鉱脈を掘るにも限度があるでしょう？」

「だから、こうしてるんだよ」

アルトはクロノから歴史書を受け取ると、それを開く。

例年のロロノ川の氾濫は治水工事によって抑えられた。アルト・ランデオンは沿岸全域の大規模な治水工事を行い、川の流れを変えたのだった。

フラッヘ地域の農村の貧窮状態は開墾によって解決した。アルト・ランデオンはフラッヘ山の麓地域の開墾を実行したのだった。

リギス街道はランデオン領の主要街道として発展した。アルト・ランデオンはロロノ川にかかるリギス街道の橋の架け替えを実行したのだった。

そうした書き込みが数ページにわたって続いていた。

場所はランデオン領の各地域に及(およ)んでいる。

「親父殿は武人としてはまだ勇敢だと評判だったけどね。領地経営に関してはかなりズボラだった、というより、あまり関心がなかったんだろうなぁ。本人は清貧志向だったし。けど、お金がかかるからって、領民の生活を向上させることをサボったら、税収は減っていく一方だからね。徹底的に整備をする必要はあったんだ」

「あ！」

と、クロノはアルトの話を聞いて声を上げる。

「ひょっとして、領地をあちこち見回ってた他の目的って、これですか？　どこをどう整備すればいいかを調べていたんですね」

「その通り」

アルトは頷いた。

「やや回りくどいけど、文の最初に目的を書き込んで、それが消えなければ、俺が考えている領地整備のやり方は合ってること。続きに、具体的なやり方を書いて確認する。これで無駄のない領地改革が可能ってわけだ」

以前、歴史書に書き込んだ文章が、後半部分だけ消えたことがあった。

一方で、その逆――書き込んだ後ろ側を残して、前の部分が消えたことはない。

「つまり、歴史書への書き込みが《実現できるかできないかの判定は、書かれた順番に行われる》んだ」

「ほうほう」

クロノが笑みを浮かべて頷いている。

アルトが見出したルールが正解であるときの反応だった。もう、この精霊の態度は、完全に読み解けるようになってきたアルトだった。

「さらに、この手の改革を書き込んでて、わかったことがある」

「なんです？」

「例えば、街道の整備について書き込む前に、その街道沿いにある都市の発展について書いたら、その文字は消えてしまった。同じ文章を、街道の整備について書き込んだ後に書いたら消えなかった。他にもいくつか、似たような事例で試したけど、結果は同じ。つまり《歴史書の記述の順番を飛ばして書き込んだ場合、それが実現できることでも文字は消える》ってことだ」

「ふむふむ」

このルールも正解のようだった。

「どんな歴史書も、全（すべ）ての出来事が完全に時系列

に沿って書かれているわけじゃない。話の流れで前後することはあるだろう。だから、さっきの改革の羅列みたいな文章の場合はそれほど厳密な時系列は求められない。ただ、明らかに因果関係の認められるものに関しては、このルールが当てはまるみたいだな」

例えば、二国間に戦争があって、その戦争の勝者が、三つ目の国と戦うことになるとする。

この場合、最初の戦争の記述をまず歴史書に記さないと、次の戦争に関しての記述はできない。

なぜなら、最初の戦争の結果が確定しなければ、次の戦争でどんなことが起こる可能性があるかが

確定されないからだ。

これは《ある人物の行動を指定する場合には、その人物が取りうる可能性のある行動でなければいけない》ルールに近い。

歴史書への書き込みは、可能性のあることしか実現できないのだ。

「ま、だから、ともかく、こうやって地道にできることを探ってるってわけだ」

以前のランデオン領では、それすらもままならなかった。

しかし、今は金鉱からの収入があるし、歴史書のおかげで効果のある改革だけを行うことができ

る。

地道とはいえ、相当効率のよい作業だった。

「いやぁ、順調ですね」

「そうだな。最近はエレナもついてこなくなったし」

前に、娼館に行くふりをして撒(ま)いて以来、エレナはアルトたちに同行しようとはしてこなくなった。相変わらずランデオン領の屋敷には滞在しているが、出かけるアルトたちを見かけても、手を振って送り出すだけであった。

「またぁ、そんなこと言っていいんですか？　エレナさんがかわいそうですよ」

「べつに邪険にしたいわけじゃないけどさ。歴史書のことはやっぱりエレナには――」

「私がどうかしたのかしら？」

突然背後から聞こえた声に、アルトはいつになく驚いた。

振り向けば、いとこが腰に両手を当てながら、にこやかに笑った怒り顔、という器用な表情で立っていた。

「え、エレナ。どうしてここに？」

「これまで、アルトが出かけるときは、ずっとこっそりつけてたのよ。アルトが、実は娼館になんて行ってないってわかってからね」

「どうしてそれを……」

「あのとき、すぐに娼館に引き返して、使用人が忘れ物を届けにきたふりをしてみたの。けど、アルトはすぐ表の玄関から出ていったって。だから、そうまでして私に隠したいことがあるんだって知ったのよ」

「すごいな……諜報の素質があるんじゃないか」

「それ褒めてるの？」

エレナはジト目でアルトを睨むが、すぐに「さあ！」と詰め寄ってきた。

「いいかげん白状しなさい、アルト。なにを隠しているの。歴史書ってなんのこと？　前にスルイ

街道の砦で見た〈イリスガルド興国記〉。あの本のことじゃないの？」

どうやら話を逸らすのは無理なようだった。

アルトは仕方なく、ちゃんと説明することにする。

ただし、やはり本当のことは言わないでおく。

「……確かにあの本は歴史書だ。けど、それがどうかした？」

「ごまかさないで！　アルト、あの本、いつも持ち歩いてるでしょ」

「あれはお護（まも）り代わりに持ち歩いてるのさ。親父殿が好きだった本みたいでね」

「あ……そうだったの」

エレナはハッとしたように息を呑んだ。

この理由なら、本を終始持ち歩いているのも、以前、アルトがエレナに本を見せたがらなかったのも、納得だろう。

と思ったら、クロノが笑いながら言ってくる。

「またまたぁ、ご主人ったら適当なことを。歴史書を手に入れたのは、お父様が亡くなったあとじゃないですかぁふぎゃ！」

「お、ま、え、は！」

四連続でデコピンを食らわせて黙らせるが、すでに遅い。

エレナはじっとりした目でアルトを見てくる。

「……どういうこと、アルト？」

「いや、えっと、あはは」

ごまかそうとするアルトだが、もう言い訳がいつかない。そもそも、嘘をついたことがバレてしまったのだ。これ以上なにを言ったところで信用されないだろう。

エレナはアルトとクロノを交互に見やる。その表情に、なんだか、羨ましそうな、悔しそうな感情が混ざっているように感じられて、アルトは首をかしげる。

やがて、エレナはまっすぐにアルトを見つめると言ってくる。

「ねえ、お願いアルト。教えてほしい。その歴史書のことじゃない。アルトがなにをやろうとしているのかを知りたいの」

彼女のまっすぐな態度に、アルトは口を閉ざす。

その真摯（しんし）さは、幼いときから、彼では持ち得なかった、エレナだけの武器だった。

「私だって――アルトの役に立ちたいから」

「……」

見つめ合うこと数秒。

先に視線を逸らしたのはアルトの方だった。

「――クロノ、本を」

「いいんですか？」

「これ以上隠しておくと、かえってややこしいことになりそうだから」

アルトは、エレナに歴史書を差し出しながら告げる。

「一つ、約束してくれ」

「なに？」

「この本のことは、誰(だれ)にも秘密にすること。俺とエレナ、二人だけの秘密だ」

「わかった。約束する。アルトと私だけの……」

とエレナはちょっとうっとりした顔になるが、横でニヘラニヘラと笑っているメイド服のクロノに気づく。

「ちょっと待って、彼女が知ってるなら二人だけじゃないでしょ」

「こいつは人間じゃない」

「へ？」

目を丸くするエレナに、アルトは歴史書と、クロノについて説明した。

説明を聞いて、まさか、という顔をしていたエレナだったが、アルトが歴史書を開いて、中の文章を見せると態度を変えた。

「……本当だ。あのときの騎馬民族との戦いのこと……金鉱のことも書いてある……」

「ま、そんなわけだから、俺はこれを使って、楽

をして、楽な人生を送ることができるよう頑張ってる最中ってわけ」

なんだか矛盾している気のするアルトの言葉に、エレナは頷く。

「なるほど……それでアルト、領地経営を熱心にやってたのね。変だと思ったのよ。確実に利益が出ること以外やりたくないって昔から言ってたのに、急に働き者になって」

「ご主人は昔からそういう性格だったんですね……」

「そうなのよ！」

呆(あき)れ顔でアルトを見るクロノに、エレナは食い

つく。

「やる気がなくて、本ばかり読んでて、お父上のランデオン男爵とは大違い。これで戦争なんかして大丈夫なのかなって思ってたわ。っていうか今でも思うわ」

「あーわかります！　確かにご主人、戦場になんか出たら真っ先に殺されてそうです！」

「でしょー！　子供の頃だって私と剣技の訓練してるときに――」

「……」

エレナはあっという間にクロノと意気投合していく。

変に険悪になるよりはいいが、打ち解けるネタが先ほどからアルトの悪口ばかりなのが気になる……。

「まあいいけど……ん？」

と、ふとアルトは視界の隅に妙なものを捉(とら)える。

アルトたちがいる場所よりも高い山の上。

その辺りでなにかが光った。

太陽の光がなにかに反射したのとは違う。

あれは、魔法の発動光だ。

「――危ない！」

アルトは即座に動いていた。

駆け出し、未(いま)だクロノと笑い合っているエレナ

に体当たりし、そのまま地面に押し倒す。

「な、なにアルト!?」

「動くな！」

びっくりして目を丸くするエレナに一喝。

次の瞬間、地面に、矢の形をした炎が突き刺さった。

「誰だ！」

アルトはすぐに立ち上がり、先ほど光が見えた辺りを注視するが、人の姿は見られない。すでに退却したようだ。

「エレナ、大丈夫？」

「え、ええ」

差し出された手を握って立ち上がりながら、エレナは戸惑いがちに頷く。

「今のは……？」

「さて……暗殺者だと思うけど。エレナ、命を狙われる心当たりはないかい？」

「そんなのないわよ！」

「だろうね……。さて、どうしたものか」

アルトは肩をすくめる。

心当たりはない、と言ってもそれは、特定の誰かに恨まれてはいないはず、という程度のものだ。

アグニェッタ子爵くらいの領地なら、その相続権を有するエレナを殺して、利益を掠(かす)め取る画策

をしている者がいてもおかしくない。この時代の貴族とはそういうものだ。

「しかし、油断してたな」

「なにがです、ご主人？」

クロノが問う。

歴史書についてエレナに隠す必要がなくなったので、アルトはこの場で語ることにした。

「この歴史書は『書き込んだことが実現する歴史書』だけど、それは書き込まなかったことは実現しないということを意味するわけじゃないんだ。俺が望んでいなくても、エレナの暗殺という事態がもともと起こるはずだったのなら、起こってし

まう。これはちゃんと意識しておかないと危険だな」

アルトは改めて辺りを警戒するように見回した。まるでそこらじゅうの木陰（こかげ）に暗殺者が潜んでいて、こちらを狙っているような錯覚に、彼は襲われるのだった。

〈未来の歴史書〉ルール

6：実現できるかできないかの判定は、書かれた順番に行われる。

7：歴史書の記述の順番を飛ばして書き込んだ場合、それが実現できることでも文字は消える。

8：もともと起こるはずだった出来事は、書き込みの有無と無関係に発生する。

第5幕　辺境貴族、暗殺者を捜索する

王国歴435年08月28日

「やれやれ、ほんとみんな現金だよなぁ」

ランデオン家の屋敷の書斎で、アルトは机に置かれた大量の書簡を眺めて呟いた。

「ご主人だって人のことは言えないじゃないですか」

「俺はね、辺境貴族が金持ちになったからって、慌てて挨拶の手紙を送ったりしないよ。めぼしい

貴族とは、金のあるなしに関係なく繋(つな)がりを作っておくさ」

「自分の利益(りえき)のために人付き合いするって意味じゃ、同じじゃないですか」

「そりゃそうでしょ。それ以外に人間関係を広げる意味なんてないよ」

父のような人間とて例外ではない。

父は王国への忠義に殉じた。それは忠義に厚い自分の姿を周囲と、そして自分自身に知らしめるための行動だ。

その、自分の利益のための行動を、人に利用されるか、自分で利用するかは大きな違いだけど。

アルトは、常に後者でありたいと思っている。

「さてさて、なにか面白(おもしろ)い手紙はあるかな」

アルトは、書簡を片っ端から開いていく。

その多くは、父の死に対する悔やみの文句と、アルトのランデオン男爵位相続に対する祝いの文句が並んでいた。

明らかに、ランデオン領が金鉱脈の発見で活況を呈しているとわかってから送られてきたものだった。中には、あからさまに鉱脈の共同経営を持ちかけ、おこぼれに預かろうとしているような手紙もある。

アルトがぼやきたくなるのも無理はなかった。

とはいえ、これは人脈を広げるための大いなるチャンスである。

アルトは一通一通に丁寧に返信をしたためていく。

その様子を退屈そうに眺めていたクロノが、不意に言ってきた。

「そういえば、エレナさんは大丈夫でしょうか？」

「心配しても仕方ないよ。少なくとも、ここにいるよりは、実家にいたほうが安全だ」

そう。

九月にあるという、どこぞの貴族主催のパーティに出席するまでランデオン領に滞在すると言っ

ていたエレナだったが、暗殺の件があって、さすがにアグニェッタ家に戻っていた。

暗殺の件はアグニェッタ子爵にも伝えておいた。あの屋敷で厳重に警戒していれば、問題はないだろう。

「歴史書で暗殺を防いだりできないんですか？」

「お前は……わかってわざと言ってるのか？」

アルトは呆（あき）れ顔で、卓上に置いてある〈未来の歴史書〉に視線を向ける。

「……特定の人間が暗殺されるのを、この本で防ごうと思ったら『ずっと安心して暮らしました』とでも書くしかない。けどこれは《抽象的な表現

は実現しない≫ルールに抵触するから無理だ」

「ふむふむ」

「ずっと先の未来に、その人物がなにかをする

例えば『五年後にエレオノーラ・アグニェッタは誰(だれ)それと結婚する』とでも書けば、それまでは生きられることになるけど、これは≪歴史書の記述の順番を飛ばして書き込むことはできない≫ルールに反するので駄目」

「ほうほう」

「じゃあ、毎日『今日も彼女は平和に一日を終える』とでも書けばいいかというと、これはそもそも歴史書に書かれるような歴史的記述じゃないか

ら認められないみたいだ」

「なるほどなるほど」

理解しているのか怪しくなるほど、むやみやたらと頷（うなず）くクロノ。

が、彼女はふと思いついたように言ってきた。

「エレナさんじゃなく、暗殺者のほうをどうにかできないんですか？　ご主人が暗殺者を捕まえたって書いちゃうとか」

アルトは首を横に振る。

「ダメだった。多分それだと《行動の指定には、歴史書の記述として認められる、客観的な人名、種族名などが必要である》っていうルールに合わ

ないんだろうな。暗殺者の名前、せめて通称がわかればやりようがあるけど、それがわかるくらいなら、歴史書がなくてもどうにかできるし」

「ふぅーむ、けっこう不便ですね、この歴史書は！」

「お前が言うなよ……」

アルトはその当の歴史書に力を供給している精霊を睨(にら)みながら呟く。

「そもそもそれは俺のセリフだよ。なんでスクルド神は、こんな制限の多い歴史書を作ったんだろう。最初から、書き込んだことがなんでも実現する予言書とかにしてくれりゃ楽だったのにさ」

「それは、このほうがおもしろ……いえ、あの、秘密です」

「今、面白いって言いかけなかったか？」

「いいえ、いいえ。女神スクルド様の深遠なるお考えは、しもべたる精霊のわたしになど、到底見当もつきませんので！」

「……まあいいけど」

神の考えていることなどわからない、というのは人間であるアルトも同じだった。

絶大な力を持っていながら、ごく稀（まれ）に気まぐれのように人間の世界に干渉してくる神々。

なぜその力を振るって人間を支配しようとしな

いのか、また逆に一切(いっさい)手を出さないようにしないのか。

その行動原理に理解は及(およ)ばない。

人間は、その力を利用できるように、あるいはその被害に遭わないように、上手(うま)く立ち回り、ときに崇拝して機嫌をとって生きていくしかない。

この歴史書に関しても『どうしてこんなものを作ったのか』『どうして人間界に送り込んだのか』という問いは、意味をなさない。

するべきは『これはどういう仕組みなのか』と『これをどう利用すべきか』という思考だけだ。

神の意図の探索など、神官にでも任せておけば

いい。

「ま、文句を言っても始まらない。この歴史書のおかげで、俺の人生がかなり楽チンに展開してることは間違いないしね」

「そうでしょうそうでしょう！　わたしに感謝してくださいね！」

「金鉱で儲(もう)かったお金でスクルド神の神殿でも建てるかな」

「わたし！　わたしの祠も横に！」

やかましく両手を挙げて主張してくるクロノを無視して、手紙の返事を書いていると、彼女はしょぼんとうなだれて、そして、

「――おや？　ご主人、手紙が落ちてますよ」
と、床から封筒を拾って渡してきた。
「ん、サンキュー」
アルトはそれを受け取って、開封する。
「おや」
「ん、なんです？」
「どうやら俺にもようやく、パーティに招待される程度の資格ができたみたいだ」
皮肉げにそう言って、アルトはクロノに手紙を見せる。
それは、九月にラグラン子爵が開催するというパーティへの招待状だった。

○

王国歴435年09月17日

「前よりは多少乗り心地が良くなりましたね！」

新調した馬車の椅子（いす）の上に尻（しり）を預け、飛び跳ねながらクロノは言う。

向かいに座るアルトは呆れ顔だが、表情は明るい。

「確かに、これは長距離の移動も苦じゃなくなりそうだ」

椅子のクッションは柔らかく、尻や腰への負担

は少ないだろう。以前より車内もかなり広いので、脚を伸ばすこともできる。

おまけに暖房までついているので、これからの寒い季節にも安心だった。

「貴族のパーティにあまりボロい馬車で登場するのも印象が悪いと思って買い替えたけど、これは正解だったな」

「ついでに屋敷も、家具を買い替えて改装しましょうよ！　屋根裏のわたしの部屋とか！」

「そうだな。これからは人を迎えることも出てくるだろうし、客間は綺麗（きれい）にしておこうかな」

「ついでに他の部屋も綺麗にしましょうよ！　わ

たしの部屋とか！」

「ラグラン子爵の屋敷はもうそろそろかな」

「無視しないでくださいー！」

ぶんぶん手を振り回して抗議するクロノ。

その手が馬車の壁に当たって、痛みにうずくまる。

残念ながら、アホ精霊が思う存分暴（あば）れられるほど広くはないのだ。

招待されたパーティへ向かっているところだった。

表向きは、ラグラン子爵の六十歳の誕生日を祝うとのことだったが、どうも実際のところは別の目的があるらしかった。

「ラグラン子爵というのはどういう人なんです？」

「んー、会ったことはないから詳しくはわからないけど、昔ながらの騎士って感じかな」

ラグラン家は、古くからイリスガルド王家に仕えてきた騎士の家系だ。

王国の設立に関わり、いくつもの戦いで武勲を立てたが、国の要職に就くことはせず、代々武人としてのみ王のため仕えている。

「上手く立ち回れば、大貴族になることも、あるいは王家と姻戚関係になって王国を動かすことだってできたかもしれないのに、そうしなかった。まあ、ちょっと親父殿と似たところを感じるね」

アルトとは別の意味で、今の戦乱の時代らしからぬ貴族である。

他人を押しのけて利益を奪い取りのし上がろうという争いとは無縁の、孤高の騎士だ。

「けど、そんな高潔の人も、歳には敵わない」

「というと？」

「高齢なのに、今のラグラン子爵には跡継ぎがいないんだ。奥方は若い頃に死別して、そのあとは戦争ばかりやってたから、再婚もしていない。もし、このまま子爵が亡くなったら、ラグラン領の所有権は宙に浮いてしまう」

「浮くとどうなるんです？」

首をかしげるクロノに、アルトはうんざりするように肩をすくめてみせる。

「血縁関係やら借金の貸し借りやらの、捏造（ねつぞう）含めての主張合戦。腹の探り合いに、裏取引、共謀、裏切り、そして最終的に内紛に発展するだろうね」

「うへえ……」

クロノもうんざりしたように肩を落とす。

「でも、その土地はイリスガルド王国に含まれるんですよね？　じゃあ、王様が、貴族同士で喧嘩（けんか）しないように丸く収められないんですか？」

「貴族は王に忠誠を誓っているけど、それは自分の土地を庇護してくれる代わりに、王のために戦う、

という契約関係だ。王が自分の土地を護(まも)ってくれないなら、王に仕える義理はない。下手に干渉すれば、別の国――アルスタニア帝国とかに寝返る貴族が出ないとも限らない」

「はぁー、王様といっても、すごく偉いってわけじゃないんですね……」

「こんな時代だからね。誰もが、少しでも周りを出し抜き、得をしようとしてる。あわよくば自分が国王に……なんて考えてる奴(やつ)もいるかもしれない」

「ご主人もその一人じゃないですか」

「俺は、のちのち人に恨みを買うようなことはし

ないよ。誰かを騙(だま)して土地を手に入れたって結局、その土地を護るために必要以上に腐心しなきゃいけないんじゃ意味がない」

「あくまで楽するために、ですか」

「そうそう。特に、ラグラン子爵領は、治安がよく安定して税収が望める。欲しがっている貴族は多い」

アルトは窓の外を眺める。

密すぎず粗すぎない林の中を抜けていく、幅の広い街道。土も綺麗に固められ、馬車の揺れは最小限だ。

土地はよく管理されているようだった。

「ラグラン子爵は、自分が原因で王国内に不和が起こるのは望まない。自分の死後も、この領地は王国の益に適(かな)うように使われてほしい。というわけで、子爵は、今回のパーティで、自領を譲るにふさわしい人物を見出すつもりだっていうのが、もっぱらの噂(うわさ)だよ」

「なるほど、やっと納得がいきました！」

「え、なにが？」

「ご主人が、なんで面倒くさそうにしながら、わざわざパーティに出るつもりになったか、ってことです。ラグラン子爵の土地目当てだったんですね！」

クロノの言葉に、アルトは呆れ顔で首を振る。

「いや、違うから」

「え、なんでです！」

「そんな意外か？　……歴史書に、ラグラン子爵が俺に領地を譲るって書いてみたけど、文字は残らなかった。今のところ、彼の土地を手に入れられる可能性はないってわけだ」

「はぁ、すでに試してましたか。さすがです」

あまりさすがだと思ってなさそうな顔で言ってくるクロノ。

「今回の目的は主に顔つなぎ。貴族の知り合いは増やしておきたいからね。あと、もしかしたら、

エレナを狙(ねら)った暗殺者がまた出るかもしれないし……なんだよ」

「いいえぇ、なんだかんだ言って、エレナさんのこと気にかけてるんだなぁと思いまして――痛あ！　なんでデコピンするんですか！」

「お、着いたぞ」

アルトはクロノを無視して言う。

窓の外には、砦(とりで)のように堅牢な塀を張り巡らせた屋敷が姿を現していた。

○

普段はかなり質素で殺風景なのだろう大広間に、絨毯（じゅうたん）やタペストリーで申し訳程度の装飾がなされ、パーティの会場になっていた。

大勢の貴族がそこここで談笑している。

「リーランド様の土地は、今年は豊作だったとか。さぞ実入りがよく……」

「グロースター伯の若様が王宮に入られたとか。いったいどんな勲功を……」

「アラッサム辺境領はどうなのです？　帝国の間者が領内をうろついているという噂を聞きましたが……」

行われているのは、雑談という名の情報交換だ。

誰も彼も、人の大勢集まるこの機会に、ここぞとばかりに有利な情報を得ようとしている。

そんな貴族たちの様子を眺めながら、クロノは言う。

「なんか誕生日パーティって感じじゃないですねえ」

「貴族のパーティなんてこんなもんだよ。名目はあくまで名目。人がいっぱい集まるって事実が大事なんだ――お」

と、アルトは見知った少女の姿を見つけて、そちらへ歩いていく。

「やあエレナ。元気そうでなによりだ――どうか

した？」

「アルト……？」

エレナは目を丸くして、彼の姿を上から下まで眺め回す。

「珍しい格好をしてるから、誰だかわからなかったわ」

「ははは、パーティなんて初めてだからちょっと張り込んでみたんだけど、似合わないかな」

そう言って両腕を広げてみせるアルトはいつになく華やかな礼服姿だった。

いつも着ている、麻布の普段着姿に比べれば別人である。エレナが驚くのも無理はない。

「……い、いえ、とてもいいわ。いつもそうやってピシッとしてればいいのに」

一瞬言葉を失っていたエレナは、慌てた様子でそう言ってくる。

「エレナも似合ってるよ」

「あ！　……ありがと……」

不意打ちを食らって、真っ赤になってしまうエレナ。

彼女は、パーティ用の、装飾の多いドレス姿だった。

「アグニェッタ嬢、この方は？」

「お親しいようですが、ご友人で？」

と、それまでエレナと会話をしていた貴族たちが、アルトのことを尋ねてくる。

「初めまして。アルト・ランデオンと申します。新参者ながら、このような場にお招きいただきまして、ご挨拶に参った次第です」

いつになく丁寧な口調で自己紹介し頭を下げるアルトに、貴族たちはざわめく。

「ランデオン男爵……最近金鉱が見つかったという……」

「領地の整備も進めて……商人が各地から集まっているとか……」

ひそひそ声で言葉を交わすが、だいたい全部ア

ルトにもクロノにも聞こえていた。

それから貴族たちは、自分も名乗って軽くアルトと挨拶を交わしてから去っていった。

「なんかやけにあっさりしてますね。もっと金鉱のこととか、訊いてくるものかと」

「貴族には本音と建前（たてまえ）があるからね」

不思議そうな顔のクロノに、アルトは苦笑して言う。

「そんな露骨に、本人の前で相手の権益に踏み込んではこないさ。それに、プライドもあるだろうし」

「プライドですか？」

「さっきの人たちはだいたい子爵か伯爵――侯爵も何人かいたかな？　俺みたいな、田舎（いなか）の男爵は一番格下だ。そんな奴を褒めるなんて、自分の格が落ちる、というわけさ」

「はぇー、面倒くさいですねぇ。人間は、別に神々や精霊と違って、格によって能力の差なんてないでしょうに」

「まったくだ」

「ちょっと、二人とも！」

ポンポンと言葉を交わすアルトとクロノの間に、エレナが割って入る。

「そんな話して、周りに聞かれたらどうするのよ」

「大丈夫。俺たちの話なんて誰も聞いてないよ」
アルトの言う通り、貴族たちはそれぞれの会話
──情報交換に夢中で、アルトの言葉など聞こえていそうにない。
しかしエレナは気が気ではない。
「それにしても、こんなところでする話じゃないでしょ」
「なんだ。エレナもわりと同じ考えだと思ってたけど」
「だから！　……それはそうだけど」
最後にボソリと付け加える。
アルトは満足そうにニヤニヤ笑った。

「それにしても、メイドのクロノがくっついているのはマズいんじゃないの？」

エレナは気遣わしげに周りを見回す。

どの貴族も使用人を連れてきているが、多くは壁際に控えている。貴族とともに行動している者も、多くは相談役でもある執事ばかりだ。

アルトは肩をすくめ、

「別にマナー違反じゃないでしょ」

「そうだけど……パーティで一緒にいる女性って、その、ええと」

と言葉を詰まらせるエレナ。

確かに、出席している貴族の隣にいる女性は、

多くが妻である。この場にはいないようだが、妻でない場合は愛妾であることが多い。つまり、メイド服を着ているクロノの場合は、アルトとそういう関係であると疑われるかもしれないのだ。

アルトは「あはは」と笑い飛ばすと、

「うわー、それは困るな。クロノ、壁際でおとなしくしてて」

「ちょっとご主人！　そこは『いいじゃないか、俺とクロノの仲を見せつけてやろうぜ』とか言うところでしょー!?」

「ないものは見せつけられないんだよなぁ」

「ひどい！」

「ちょっと……！　いつものノリで会話しない！」
エレナは焦(あせ)って二人を止める。
「私はクロノが精霊だって知ってるからいいけど、他の人に変な目で見られるでしょ」
「それもそうだね」
必要のないところで注目されるのは望むところではない。
「あの、お飲物をどうぞ」
と、そこへ、近くを通りかかった給仕の少年がトレイを差し出してきた。
アルトはその上のグラスを手にとる。
エレナとクロノももらう。あちらこちらで給仕

が飲み物を配っていた。乾杯の準備だ。どうやら、もうそろそろ子爵が登場するらしい。

「ん？　君、落とし物だよ」

立ち去ろうとした少年のポケットから落ちた紙片を拾い上げ、アルトは呼びかける。

「……っ！」

少年は慌てた様子で、アルトの手からひったくるようにそれを受け取る。

「よっぽど大切なものなんだね」

「あ、いえ、その……ありがとうございます。失礼いたしました……」

逃げるように去っていく少年の背中を、アルト

は見送る。

「あの紙片は……」

「どうかしたの、アルト？」

エレナの問いに首を振って答え、アルトはそのまま話題を転じた。

「ところで、あれから身の危険は感じてない？」

「ええ。そうね。お父様は全然屋敷から出してくれないから、危険もなにもないわ。今日だって危うく来られないところを無理やり――」

と、エレナが愚痴を語り出した途中で、広間の、屋敷の奥へ通じる扉が開いた。

現れたのは、長身痩軀の、白髪の老人だった。

弱々しいという印象はまるでない。例えるなら、研ぎすまされた一本の槍。

この屋敷の主人である、ラグラン子爵であった。

アルトは登場した本日の主役を眺めながら、呟く。

「すごいな。今から戦場に行くところだって言われたら信じそうなくらいの威圧感だ。あれで本当に六十？」

「そうね、久しぶりにお会いするけど、矍鑠としてらっしゃるわ」

カツ、と靴音を鳴らして、子爵は階段手前の踊り場に立った。

一段高い場所から、皆を睨むような視線で見回

してから、口を開いた。

「本日は、私の招きに応じていただき感謝する。本来、不調法で、このような華やかな場は苦手ではあるが――」

本人が主張する通り、硬い口調で挨拶するラグラン子爵。

それまで雑談を交わしていた貴族たちも、さすがに口を閉じて、彼のほうを注視する。

と、そのときだ。

――ガシャアアアアン！

唐突に、ガラスの割れる音が鳴り響いた。

バラバラと窓ガラスが割れて、降(ふ)り注(そそ)ぐ。

響き渡る悲鳴。

そして、

「危ない！」

アルトはエレナの腕を掴(つか)んで引いた。

「きゃっ」

次の瞬間、大広間の中央で炎が立ち上る。矢の形をした炎が床に突き立って、絨毯を燃え上がらせたのだ。

明らかに、炎魔法による攻撃だった。

悲鳴と怒号が響き渡り、広間は大混乱に陥(おちい)る。

貴族たちは、我先にと逃げ出そうとするが、果たしてどちらへ逃げればいいかわからず、反対方

向へ向かおうとした者同士が激突したりして、さらに混乱を増していく。

「……」

そんな中、アルトは広間のあちらこちらに視線を巡らせる。怪しい動きをしている者がいないか探るためだ。

そういう者は見当たらなかったが、使用人たちが、一人の令嬢を、先ほど子爵が現れた扉から避難させるのが見えた。

その少女の顔は見えなかったが、

「ずいぶん丁重な扱いだな。よっぽど大事な客なのかな……？」

疑問に思いつつ、記憶にとどめておく。

「落ち着けええい！」

やがて、混乱の続く広間に大喝が響いた。

ラグラン子爵が、額に血管を浮き立たせて、皆を睥睨していた。

「この程度、戦場ではよくあること。大騒ぎするようなことではあるまい！　イリスガルドの騎士たる方々が、みっともないではないか」

子爵の言葉に、混乱は強制的に収まる。

すぐに使用人が消火にあたり、炎は消え去った。

とはいえ、動揺はなくならない。騎士とはいえ、ここにいる者のほとんどは、自分自身では戦わず、

後方で指揮だけしているような者である。魔法攻撃に怯えるのも無理はなかった。

ラグラン子爵は、そんな者たちを見回して、怒りに身を震わせる。

「情けない……なによりも舐められている。これだけの騎士が集う場に、奇襲を受けるなど……！」

ダン、と床を踏み叩いて、子爵は声を荒らげた。

「各々方！　今の魔法を放った不届き者を見つけよ！　下手人を見事捕らえた者に、私はこのラグラン子爵領をすべて譲ると約束しよう！」

「「！！！！」」

子爵の言葉に、残っていた動揺は一気に収まった。

同時に、別の種類の動揺が広がっていく。

「まさか、そんな条件で……」

「いや、しかしこれだけ大勢の前で今はっきりと……」

「強制力はなくても、他の者に一歩抜きん出ることに……」

次の瞬間、歓声が上がり、貴族たちは我先にと屋敷の玄関へ向かった。

「攻撃は外からだ！　まだ近くにいるはずだぞ！」

「追え！　山狩りだ！　怪しい者は一人たりとて逃すな！」

「絶対に捕まえろ！　領地領地領地領地ぃ！」

皆大騒ぎしながら飛び出していき、広間に残ったのは、ラグラン子爵とその使用人たち、それにアルト、エレナ、クロノの三人だけだった。

「ご主人は行かないんですね。やっぱり今回は、領地を手に入れるつもりはないってことですか」

「うっひょう！」

クロノの言葉を遮(さえぎ)って、アルトはその場で飛び上がった。

「そんなわけあるか。こうなったら話はべつだよ。暗殺者を捕まえれば、ラグラン領がもらえる。こんな楽な話、逃す手はない」

「でも、アルト。あの炎の矢ってラグラン子爵じゃなくて私を狙って――」

「しーっ」

不安そうに言ってくるエレナに、アルトは慌てて告げる。

「せっかく領地をくれるって言ってるんだから、このままにしておこうよ。エレナへの脅威も取り除けて、一石二鳥じゃないか」

「……」

「……」

調子のいいことを言うアルトに、エレナとクロノは両サイドからジト目を向けるのだった。

○

「けど、前に、暗殺者を見つけるのは無理だって言ってませんでしたっけ。っていうか、みんな山狩りに行っちゃいましたけど、一緒に行かなくていいんですか？　先に捕まえられちゃいますよ」

クロノが言う。

確かに歴史書で暗殺者を見つけ出すことはできなかった。歴史書での《行動の指定には、歴史書の記述として認められる、客観的な人名、種族名などが必要である》ため、名前のわからない暗殺

者の行動を、歴史書で操(あやつ)ることはできないのだ。

が、アルトは肩をすくめて、

「今回は、これまでとは条件が違う。そもそも、いくら山を探したところで、暗殺者は見つからないよ」

「え？　どういうこと？」

エレナの言葉に、アルトは広間の中央へ向かう。

絨毯の炎は、すでに使用人たちの手で消し止められていた。

「ちょっと失礼」

そう言ってアルトは絨毯をめくり上げる。そこには、矢型の炎が刺さった際にできた穴が空いて

いる。

「見ろ。穴の方向からもわかるけど、矢は割れた窓とは反対の方向から飛んできてる」

「ってことは、えーと……矢はぐるっと回って落ちたってことですね！　――痛ぁ！」

クロノはアルトにデコピンを受けて額を押さえる。

「そんな動きしてなかっただろ。窓を割ったのは外からの襲撃と見せかけるため。わざわざそんなことをしたってことは、つまり暗殺者はこの屋敷の中にいるってわけだ」

「なるほど……ってええええ！」

大袈裟に驚いてみせるクロノ。
エレナも困惑した顔で、
「つまり、集まった貴族の中に？」
「その可能性もある。でも、それより怪しいのは……」
と、アルトはラグラン子爵のところへ足を向ける。
子爵は執事と会話を交わしていた。
「――は、お部屋の方へ――」
「見張りは？」
「ノルとアレイを廊下に立たせて――」
「あの二人なら安心だな。あとでお詫びに参らねば――」

と、どうやら、先ほど避難させた令嬢について会話している様子だった。

ひと段落ついたらしいところで、アルトは声をかける。

「お話し中のところ失礼いたします、ラグラン子爵」

「構わん」

子爵は執事を下がらせ、アルトに向き直る。

「先ほどの推察は聞こえていた。いい観察眼と冷静な判断力だ。慌てふためいて屋敷を飛び出した者どもとは違うな。貴公、名は？」

「お褒めに預かり光栄です。アルト・ランデオン

と申します」

「ランデオン……では貴公がランデオン男爵の……」

「はい、長男です。亡き父から領を預かりました若輩者です」

「そうであったか……」

子爵はわずかに口を閉ざす。

「貴公の父君は、勇敢な騎士であった。先の戦いは残念なことだったが、貴公もぜひ、父に恥じぬ誉れ高き騎士となることを願う」

「はぁ、頑張ります……」

わかってはいたが、老貴族とのあまりの考え方

の違いに、思わず普段のだらけた口調が出てしまうアルト。

しかし、慌てて威儀を正し、

「さっそくですが、この屋敷の使用人についていくつかお訊きしたいことがあります」

「ふむ、なんだね」

「本日のパーティのために、臨時で雇った使用人はいますか？」

「二十人ほどいる。普段は私一人の生活なのでね。それほど使用人は必要ない」

「その中で、魔法を使える者はいますか？」

「いや、今回の仕事は給仕のみだ。雇うときに魔

法を使えるかどうかは訊いていない。自分から申告してきた者もいなかった」

「そうですか……」

召喚魔法陣で行われる召喚魔法のような、失われた魔法技術に対し、現在使われている魔法は元素魔法と呼ばれる。

空気中の魔元素を、呪文（じゅもん）の詠唱によって利用するもので、威力を問わなければ、十人に一人くらいは、それを使える程度の魔力を有している。

それほど珍しいものではないが、使えると便利ではある。

だから、使用人として採用されるときなどは、

魔法が使える者はそうアピールすることが多いのだが、今回そうした者はいなかったという。

（それに、さっきの紙片だ……）

おそらく暗殺者は特定できた。

が、このままでは証拠がない。問い詰めたところで、しらばっくれられれば、それ以上追及のしようがない。

（ここは、歴史書を使ったほうがよさそうだな）

アルトは子爵に呼びかける。

「その臨時で雇った使用人の名前を教えていただけますか？」

○

一旦、広間から廊下に出たアルトに、エレナとクロノがついてきた。

「どうするんです、ご主人。どうやって暗殺者を見つけ出すんですか？」

「いや、もう見つけたけど」

あっさりそう言ったアルトに、二人は目を丸くする。

「い、いつの間に!?」

「子爵と会話してただけだったじゃない」

「いや、運がよかったのもあるんだけど」
アルトは、広間への扉にちらりと視線を向けてから、
「さっき給仕の少年が紙切れを落としてたんだけど、あれ、火傷（やけど）防止の護符だったんだよね」
護符は、魔法を使う者、それも日常生活で使うようなものではなく、戦闘で使われるような威力の強い魔法の使い手が持っているものだ。
それほどの魔法を使えるなら、ただの給仕より、兵士や護衛として雇われたほうがよっぽど実入りがいい。
なのに、魔法を使えることを申告していなかった、

ということは――。

「あのガキが暗殺者ってことですね！　よっしゃとっちめてやりましょう！」

「落ち着け、アホ」

広間に乗り込もうとするクロノをアルトは止める。

「まだ、その可能性が高いってだけだ。彼が俺みたいな性格なら、危険な仕事をするよりは給仕でいたいって思うかもしれないし、あの護符は拾ったものや、誰かの形見なのかもしれない。証拠がなければ、彼を糾弾することはできない」

「ええー、あんなガキンチョ、わたしがちょっと

たぶらかせば、イチコロですよきっと」
「逆効果だから絶対やめろ」
「どういう意味ですかぁ！」
どういうもなにも、これ以上説明しようがないくらい明確なのでアルトは無視する。
「で、結局どうするのよ？　……はっ！　私は無理だからね、色仕掛けとか！」
「エレナまでアホ精霊に毒されないでくれるかな」
アルトはため息をつきながら、クロノに歴史書を取り出させる。
「もちろんこれを使う」
そして、彼は、本に書き込みを行う。

ラティーフは逃走のため炎魔法で屋敷を火事にしようとするが、そこをアルト・ランデオンが止めに入り、死傷者を出すことなく、暗殺者として彼を捕らえる。

「ラティーフ？」

「あの少年の名前だ。ラグラン子爵に訊いた」

「けど、偽名だったらどうするんです？」

クロノが訊いてくる。

確かにルール上《行動の指定には、歴史書の記述として認められる、客観的な人名、種族名など

が必要である≫。偽名だとしたら、書き込んだ文章は実現しない。

「いいんだよ。書き込んだ文字が消えて、偽名だって判明したら、あの少年は給仕の仕事で偽名を使うような怪しい奴ってことになる。それはそれで、暗殺者である証拠になる。けど――そうじゃなかったみたいだな」

アルトの言う通り、文章は光を放ち、そのまま定着した。

ということは――。

『お前！　なにをしている！』

扉の向こうで騒ぎが起こっているようだった。

アルトたちは急いで広間に戻る。

○

広間は、先ほどとはまるで違う雰囲気になっていた。

ラグラン子爵や、使用人、それに探索を早々に諦（あきら）めて戻ってきたらしい何人かの貴族が、壁際に遠巻きに立っている。

そして、先ほどの少年――ラティーフが、広間の中央あたりに立っていた。

銀色の髪に、やや浅黒い肌。おそらくは、南方

の砂漠地域に住む種族の血が混ざっているのだろう。

彼は掲げた手のひらの上で、炎を生成する。

「僕に近づくな！　この炎を乱射するぞ！」

貴族たちが悲鳴を上げる。中には、そそくさと広間から逃げ出す者までいた。

「……腰抜けどもがっ」

ラグラン子爵が呻き声を上げ、動こうとする。

「待ってください！　彼のことは俺に任せてください」

「ランデオン男爵……」

子爵はアルトの言葉に動きを止める。

ラティーフがアルトに視線を向けた。

「……邪魔をするつもりですか？　死にたいんですか？」

「それはこちらのセリフだよ」

余裕の笑みを浮かべながら、アルトは少年に歩み寄る。当然、広間の扉への進路を妨害する形でだ。

「君がさっき落とした護符、ナプキンとすり替えたんだけど、忙しくて気づかなかったかな？　もし護符なしでそんな魔法使ったら、逃げるどころか大火傷だ。そうなる前にさっさと消すのが身のためだと思うよ」

「そんな……っ」

ラティーフは、ポケットに手を突っ込んで紙片を取り出し、ちらりと視線を向ける。それは間違いなく、火傷防止の護符だった。

「このっ……!?」

騙されたことに気づいて視線を戻したときには、すでに手遅れだった。

一気に駆け出したアルトがすぐ目前まで迫ってきていた。

アルトは、炎を発生させていた少年の右腕に飛びかかりながら、少年を押し倒す。

衝撃で炎魔法は消失してしまった。

「くそっ、離せ。このぉ！」

「痛っ、痛いって！　おとなしくしなさい！　ちょ、誰か縄もってきて縄！」

アルトの身体に下敷きにされながら、少年はなおも暴れ回る。アルトはそれを押さえきれず、顔やら腹やらをボコスカ殴られた。

数分後、ラグラン子爵の部下の兵士が縄を持ってきて、少年を取り押さえた。魔法を使えないよう、護符も取り上げる。

「ふう、やれやれ、ひどい目に遭った」

「ご主人、かっこ悪いです」

「子供と喧嘩して勝てないとか……」

口々に言ってくるクロノとエレナに、アルトは

口を尖らせる。

「勘弁してよ。子供って言っても暗殺者だよ？」

と、そこへラグラン子爵がやってきた。

「どうやら貴公は、お父上ほど武術に長けておらぬらしいな」

「子爵殿まで……」

がっくりと肩を落とすアルトに、子爵はわずかに口角を持ち上げた、どうやら、笑ったらしい。

「しかし、見事であった。先ほどのやりとりからすると、すでにこの少年が暗殺者であると見抜いていたようだな」

「ええ。騒ぎを起こす前に捕まえられればよかっ

たんですが、まあ、被害が出なくて幸いでした」

「ふむ」

ラグラン子爵は頷くと、その場にしゃがみこんで、少年と視線を合わせた。

「ラティーフと言ったか。なぜこのようなことをした？」

「……」

「すぐに口を割れば悪いようにはしない。私も子供を甚振るような真似はしたくないからな」

「……」

子爵の問いに、ラーティフは一切答えようとしない。ただ、殺意のこもった目で、相手を睨みつ

けているだけだ。

「子供とは思えぬ目だな……さぞ、過酷な身の上なのだろう」

子爵は諦めたように立ち上がった。

「牢に連れていけ。あまり手荒にはしないようにな」

縛り上げられた少年は、兵士数人に抱えられるようにして連れていかれた。

「あの子、どうなるのかしら」

「さて、そこは子爵殿の裁量次第だね。ま、あの様子だと、そこまで酷い目には遭わされなさそうだけど。とはいえ、彼がエレナを狙っていたことは、

伝えておいたほうがいいかな」

エレナとアルトがそんな会話を交わしているところへ、暗殺者が捕縛されたことを聞きつけて、貴族たちが戻ってきた。

そんな彼らに向けて、子爵が言う。

「不届き者は、ランデオン男爵が捕らえた。よって、約束どおり我が所領は、私の亡き後、若き男爵に譲ることにしよう。本日は、我が後継者の決まったためでたい日ともなった。各々方、引き続き、楽しんでいっていただきたい！」

先ほどに比べ、明らかに上機嫌な調子の子爵。

そして、場は一気にざわめく。

「ランデオン男爵？　どこの貴族だ？」
「え、あの、最近金鉱が出たとかいう……」
「あの辺境の貧乏貴族が!?」
ひそひそ声の中には、あからさまにアルトを蔑(さげす)むような言葉もあった。
ジロジロとアルトを値踏みしてくる者、聞こえよがしに舌打ちしてくる者、反応は様々だった。
お互いに牽制(けんせい)し合っているのか、アルトに話しかけてくる者はいなかった。
「……なんか感じ悪いですね！」
「ま、格下の貴族に対する反応なんてこんなもんだよ」

憤るクロノに対し、アルトはあっさりとした態度だ。

と、そこへ、ラグランジ子爵の使用人が駆け寄ってくる。

「ランデオン閣下。旦那様が、別室でお待ちです」

「子爵殿が？　わかりました」

アルトは使用人に言われ、広間を出た。

一緒についてくるクロノが小声で言う。

「なんですかね？　ご褒美ですかね？」

「真面目（まじめ）な子爵殿のことだから、領地譲渡の契約をさっさと交わしてしまうつもりかも」

しかし、向かった先では、まったく予測不可能

の事態がアルトを待ち受けていた。

○

その部屋には、ラグランス子爵と、数人の使用人。それと、先ほどの魔法攻撃の際、避難していくのを見かけた令嬢がいた。

白いドレス姿。ヴェールを被っていて、顔はよく見えない。

令嬢は、アルトに向かって、両手を叩いてみせた。

「先ほどの立ち回り、見せていただきました。ラグラン卿に、使用人の中から犯人を見つけ出した

手際についてもお聞きしました。お見事です、ランデオン卿」

美しい声でそう告げる少女。

こちらへ歩み寄ってくる姿勢といい、その発声といい、かなり上流の家庭で育った娘のようだった。

「ありがとうございます、お嬢様」

とりあえずそう返すアルト。

すると周りの使用人が批難の視線を浴びせてくる。どうやら、彼らはラグラン子爵ではなく、この少女の使用人であるようだった。

「言葉に気をつけろ。この方はっ」

「よいのです」

それを押しとどめる少女。その慣れた様子は、こういうやり取りをよく経験していることを感じさせた。

「……」

一方アルトは思考を回転させる。

いくら下級貴族とはいえ、今のアルトの態度が礼を失していたとは思えない。

が、例外はある。

この少女が貴族ではない――貴族以上の身分である場合だ。

ここが、イリスガルド王家と深い繋がりを持つラグラン家の屋敷であることを考えれば、答えは

一気に絞られる。

「まさか……王女殿下、であらせられますか？」

「ふふ、さすがです、ランデオン卿」

上品に微笑む少女。

「申し遅れました」

少女はヴェールをあげて、その顔をアルトに見せた。

絹糸のような銀色の髪。透き通るような白い肌。

アメシストのような紫の瞳（ひとみ）がアルトを捉（とら）える。

「初めまして、ランデオン卿。わたくしは、リーゼロッテ・イリスガルドと申します」

アルトは息を呑（の）む。

即座にその場に片膝(ひざ)をついて臣従礼を示す。

そして、真っ先に浮かんできた疑問を口にした。

「えっと――なぜ、王女殿下がこのような場に？」

問われた王女は、悪戯(いたずら)めいた、しかしあくまで上品な笑みを浮かべるのみだった。

第６幕　辺境貴族、王女に謁見する

王国歴４３５年１０月０３日

「馬車が全然揺れないんですけど！　また買い替えたんですかご主人！」

「違う。道が綺麗（きれい）なんだよ」

はしゃぐクロノに、アルトは短く答える。ここまで五日ほど旅をしてきて、揺れなくなったのは今日からである。そんなにポンポン馬車を買い替えられるわけがない。

「王国の直轄領に入ったんだよ。小国とはいえ、イリスガルド家は古くからこの辺りを統治してきた。街道は整備されているさ」

「はー、確かに、レンガで舗装されて綺麗ですね。ランデオン領とは別世界です」

窓から外を見て言うクロノ。

相変わらず一言余計だが、言い分はもっともである。

「それにしても、王女殿下から直接呼び出されるとは思いませんでしたね」

「ああ、意外だった」

そう答えながら、アルトは外套の懐（ふところ）にしまった

書状を取り出して、改めて眺める。

イリスガルド王家の家紋が描かれた封筒。そこには、先日ラグラン子爵の屋敷で出会ったリーゼロッテ王女からの手紙が入っていた。

そこには、長々とした時候の挨拶（あいさつ）の後に、このように書かれている。

――ぜひ、王都へ足をお運びください。歓迎いたします。そして、王女として、男爵にはご相談に乗っていただければと思っております。

「相談ってなんですかねぇ」

「さてね。少なくとも、金を貸してほしいってのと、結婚してほしいってのは違うみたいだった」
「歴史書に書いて試したんですか？」
「もちろん。事前に用事が分かっていれば、取れるリアクションが変わるからね」
「暗殺者を捕らえたときのドヤ顔がムカついたから処刑する、とかはどうです？」
「そんな王女がいてたまるか……処刑、領地没収とかの罰も外れ。逆に、重臣に召抱え、みたいなのでもなし。想像がつかないね」
アルトは肩をすくめる。
「まあ、なんにしても、王族とお近づきになれる

のはありがたい。それも向こうからアプローチしてくれるなら願ってもないさ」

「王族、ですか？　リーゼロッテ王女、じゃなく？」

「？　どういう意味。そういえばエレナも同じようなことを訊いてきたけど」

エレナは今回は留守番である。

ラグラン子爵の屋敷での騒ぎの後、エレナは再びランデオン領に居ついていた。彼女曰(いわ)く、

『アルトが歴史書でおかしなことをやらかさないか心配でしょうがないわ。暗殺の危険はなくなったし、引き続き見張らせてもらうわよ』

とのことだった。

しかし、さすがに今回は、本人が王族に呼ばれたわけではないので、連れていくわけにはいかない。

クロノはほおを膨らませて、

「ですから、王女の美貌に目が眩(くら)んだんじゃないんですかってこと」

「あはは、まさか」

アルトは軽く流す。

「確かに美人だけど、俺の好みじゃないね」

「……あの、ずっと疑問だったんですけど」

「え、なに、急に神妙な顔して」

いつになく真面目(まじめ)な顔で言うクロノに、アルト

は思わず身を固くする。

「ご主人って、男が好きだったりします？」

「は？」

固くした身がそのまますっ転びそうになった。

「なに言ってんの？」

「いえ、だって、リーゼロッテ王女にも、エレナさんにも、わたしにすらも、全然惹(ひ)かれる様子がないじゃないですか」

「最後、なんでちょっと強調したのか意味わからないけど」

とアルトは肩をすくめつつ、

「俺の好みはもっと、大人っぽい色気のあるお姉

さんだから」
「へえ」
「バリバリと仕事をこなす人だとなおいい」
「ほう」
「さらに、そうやって稼いだ金で俺を養ってくれれば言うことなしなんだが」
「……それは好みとは違うのでは」
呆（あき）れてため息をつくクロノ。
アルトは王女からの手紙をしまいながら言う。
「ただ、王族の中でも特にリーゼロッテ王女が重要なのは事実だ」
「！　やはり美貌に目が……」

「違うっての！　今のイリスガルド王国は、実質彼女が統治してるようなものなんだよ」

「どういうことです？」

首をかしげるクロノに、アルトは説明する。

イリスガルド王国の現国王、つまりリーゼロッテの父親だが、彼は随分前から病気がちで臥せっている。政務も満足に行えない状態だ。

この場合、王子が代役を務めるのが慣例だが、第一王子、第二王子ともに、隣国から奪った植民領の統治に追われていて、本国に戻ってくることができない状態だった。

そこで、第一王女であるリーゼロッテが、国務

を代行しているのだ。

「大丈夫なんですかね？　まだ若いのに」

「確か十八歳だったかな？　まあ、宰相のジストリエって人が補佐してるっていう話らしいから、とんでもないミスはないんじゃない？　問題は、決定権を持つ人間がいるかどうかってことだろうから」

「はあ」

クロノは不思議そうに首をかしげつつも頷（うなず）いた。

判断の能力を持つ者と、決定権を持つ者が別に必要ということ自体が、神々の世界で育った彼女には理解しがたいのかもしれない。

「ま、ともかく、今この国で一番発言権が強いのは、リーゼロッテ王女だ。そんな王女殿下の覚えがめでたければ、領地も護(まも)ってもらいやすいってわけ」

実際の地位がどうであれ、王女と繋(つな)がりのある貴族の土地をむやみに奪おうとする者はいないだろう。少なくとも、そいつが王国の庇護を得たいなら、ある程度の抑止にはなる。

アルトは、歴史書を開くと、記述のある最終ページを開く。

そこには、アルトがラティーフを捕らえたという一文の次に、新たに文章が現れていた。

アルト・ランデオンは王女リーゼロッテ・イリスガルドと対面した。

この一文は、アルトが書き込んだものではない。

歴史書ルールの前提として《歴史書には、召喚者が召喚した時点までの歴史が書かれている。そこから先の記述は、現実の歴史の実現に従って自動的に追加されていく》。

この記述はそれに従ったものだろう。

重要なのは、この出来事が、歴史書に記されるべきことだと認められたということだ。

つまり、あの邂逅は、あの場限りの偶然で終わ

るものではなく、のちの歴史の展開に影響を与える事件だったということになる。

なんでも、リーゼロッテ王女は、ときどきああして貴族のパーティに紛(まぎ)れ込(こ)み、臣下の忌憚ない意見を聞いたり、人間関係を観察したりしているのだそうだ。まるで娯楽読み物や民衆劇に登場するお姫様である。あの場でアルトが王女に見出されるのは、必然だったとも言える。

ともあれ、この機会を逃す手はない。

「そのためには、王女との結びつきを、貴族たちの前で強調しておかないといけない」

「それで、例のアレですか」

「そう。例のアレさ」
と、アルトは笑みを浮かべながら、足元に置いてある箱を軽く叩いた。
その中には、この馬車そのものよりも、数十倍は価値のある品が入っているのだった。
「お、見えてきたな。王都の城壁だ」
「へー、すごいすごい！　あんな大きな建物、ランデオン領で見たことないですね！」
「だから、いちいち引き合いに出さなくていいっての！」

○

王国歴435年10月04日

王都に到着し、街の宿屋で一泊した翌日。
アルトは、クロノを伴い、改めて王城へ赴いた。
大広間にて、入口から玉座まで延びる赤い絨毯（じゅうたん）の上を歩き、玉座の隣の席に座るリーゼロッテ王女に拝謁する。
そして、例のアレ――ランデオン男爵領の金鉱脈から発掘された金で作った首飾りを、彼は王女の首に自らつけた。
その光景に、居並ぶ重臣たちは、めまいを覚えた。

たかが辺境の、吹けば飛ぶような小領地を預かる男爵風情（ふぜい）が、王女殿下に対してなんと馴（な）れ馴れしい……。

礼を弁えぬ田舎（いなか）者、恥を知れ……。

無言の圧力が、王女と対面するアルトにぶつけられる。

しかし、面と向かって彼を批難する者はいなかった。

それは、王女の御前であることももちろんだが、アルトがあえて見せびらかすために用意した金の威力でもあった。

金がある。それはつまり、王国が行う戦争に対

し資金を提供できるということである。戦乱の時代、戦費はあってもあっても足りないのだ。

それを引き出せるなら、たとえ田舎の貧乏男爵でも無碍にはできない。

そのためのアピールだった。

やや成金趣味ではあったが、効果は絶大。先ほどまでヒソヒソと陰口を叩いていた貴族たちは一斉に押し黙った。

ただ、鋭く突き刺すような視線でアルトを睨(にら)んでくる。

が、彼はそんなものにはまるで気づいていない顔をして、その場を去るのだった。

○

「ふう、まるで針のむしろだったね」
王城の一角にある客間に案内されたアルトは、ソファに身を投げ出しながらそう告げた。
ここでしばらく待っているように、と案内の兵に言われたのだ。
「いやぁ、すごい感じ悪かったですけど、ご主人、なにか恨みを買うようなこと、したんですか？」
訊いてくるクロノに、アルトは肩をすくめて、
「うーん、強いていうなら、この城に来たことじ

やないかな」

「は？　どういうことです？」

「だから、辺境の男爵が王城に参上し、王女殿下に拝謁するなんてこと自体、伝統あるイリスガルド王家忠臣の大貴族の方々には不満なわけ。小者は出しゃばらず、おとなしく戦力だけ提供してろっていうことだね」

「それはさすがに偏見というものだ、ランデオン卿」

と、不意に扉が開いて、法衣のようなものに身を包んだ男が言った。傍には、リーゼロッテ王女もいた。

「失礼、その誤解はぜひ解いておかねばと思い、つい口を挟んでしまった」

「ジストリエ、貴方は実直すぎます。ご挨拶もしていないというのに」

くすり、と笑みを浮かべてから、リーゼロッテはアルトたちに向き直る。

アルトはソファから立ち上がって服装を整えた。

「改めまして、お招きいただき感謝しております」

「大義でありました。領地を引き継いだばかりでお忙しいでしょう」

「いえいえ、殿下のお召しとあらば、いつでも馳せ参じますよ」

調子のいいことを言うアルトに、クロノは部屋の端でこっそり舌を出していた。

リーゼロッテはジストリエを示して告げる。

「紹介が遅くなりました。彼は宰相のジストリエ卿です」

「初めまして、ランデオン卿」

「お目にかかり光栄です。ところで、先ほどのお話の続きが気になります。偏見とは、どういう意味でしょうか」

アルトの問いに、ジストリエは目を光らせる。

老練な狐のような表情。それは相手を推し量る視線だった。

リーゼロッテがアルトの向かいのソファに座り、ジストリエ自身は彼女の背後に立ったまま控えて、口を開いた。

「あの場にいた者たちは、重臣ではあるが、忠臣ではないということだ」

「へえ？」

アルトは、先を促すように短く言葉を返す。ここでこちらから想像を並べ立てるのは、あまり賢いやり方ではない。

ジストリエは一拍の間をおいて、続けた。

「イリスガルド王国に仕える多くの貴族は、長引く戦いのために各地を転々としている。戦いと言

っても、実際の戦闘だけではない。領地争いの調停や、領民の生活のため、その他諸々と……。王城に残っているのは、そのような仕事をしていない者ばかりだ」

「王城では仕事はないんですかね？」

「そういうわけではないが、あれほど多くの貴族は要らぬよ。王家に長く仕える重臣というのは、王の意思を各地に届ける力を持つ。それが王都にへばりついていて、なんの意味がある」

「それは確かに、ごもっとも」

「彼らは、リーゼロッテ殿下をお護りする、と言うことだけは立派だが、実質、自分の利益（りえき）を損な

うのが嫌なだけだ。目を離した隙(すき)に、他の者が自分を蹴(け)落とし、殿下に取り入るのではないかと」

「なるほど」

かくして、自分のことに腐心する者ほど、王城に残り続けることになるというわけだ。

「つまり、あの場に居並んだ皆様方は、大貴族の中でも選りすぐりの役立たずというわけですね」

「「……」」

アルトの言葉に、ジストリエとリーゼロッテは一瞬言葉を失う。

二人は、思わずといった様子で顔を見合わせ、それからまず、リーゼロッテが小さく噴き出した。

続けてジストリエも、ニヤリと笑みを浮かべる。
「どうやら、思った通りの男のようですな」
「そうでしょう？　彼なら信用できます」
そんな言葉を交わす二人に、アルトは訝しげな視線を向ける。
「なんです？　ひょっとして、俺を試してたんですか？」
「申し訳ありません」
リーゼロッテが言う。
「そのようなつもりではなかったのですが。しかし、確かめてはおきたかったのです。ランデオン卿、あなたが自分の利益のためにわたくしに近づいて

くるような人間かどうか、を」
「……一応申し上げておきますが、俺は父のような、忠節の騎士にはなれませんよ」
その発言に、二人は（ついでに部屋の端にいたクロノも）、先ほどの比ではないくらい驚いたようだった。
自らの主人に対して、そんなことをいう騎士は普通いない。
「それは、また、どういう……？」
なんとか、といった様子で問い返すリーゼロッテに、アルトは肩をすくめながら、
「俺は戦争が嫌いだからです」

きっぱりとそう言ってのけた。

リーゼロッテは探るような目でアルトを見る。

「……なぜ、でしょうか……？」

彼女が困惑するのも無理はない。

騎士とは元来、主人に仕え戦争をするのが仕事である。それをしないならば、ついさっき彼が『役立たず』と称した貴族たちと同じということになる。

「嫌いだから、できる限り戦争を避けたい。するとしても、少しでも被害は小さくしたい。名誉や武勲のために、しなくてもいい戦いをするつもりは、俺にはありません。そんなことをしていたら、ランデオン領のような小領地はあっという間に干上

がってしまいますし」

「……」

「戦争をすれば土地も民も疲弊します。領地が貧しくなれば、わずかな利益を奪い合うために、しなくていい争いまで起こることになる。いいことなんかありません。ですから、戦いはしない。するべく早く終わらせる。そして、浮いた金で暮らしやすい土地を作る――その方が、時間はかかりますが、土地を奪い合うよりも効率よく領地を豊かにできるでしょう」

アルトは笑みを浮かべて、リーゼロッテと、ジストリエを見る。

「もちろん、戦わねばならないときには戦いましょう。そうして主人を護れたならば、名誉を賜ることもあるでしょう。しかしそれは結果です。名誉を求めて自ら戦争に乗り出すのでは本末転倒でしょう」

「なるほど……」

リーゼロッテは、ジストリエと顔を合わせ、頷き合うと、アルトに向かって告げる。

「ランデオン卿、どうやらあなたを呼び寄せたわたくしの目に狂いはなかったようです。あのとき――ラグラン卿の屋敷で襲撃者を捕らえた手際を、この国のために、もう一度見せてほしい」

「はあ、いったいなにをしろと？」

アルトの問いに、リーゼロッテはごく手短に言った。

「アルスタニア帝国の大進撃を防いでいただきたいのです」

○

「いやー、ご主人はホント、嘘（うそ）が流れるように出てきますよね」

先ほどの客間とは別の、宿泊のための客室に案内されて、二人きりになるなり、クロノが言って

くる。

ちなみに王城の客室は、アグニェッタ子爵の屋敷のそれよりもさらに豪華だ。ランデオン家の屋敷と比べると悲しくなってくるので、そんなことはしない。

「嘘？　なんの話だ？」

礼服のボタンをゆるめながら問うアルトに、クロノはニヤニヤ笑いながら言う。

「『戦わねばならないときには戦いましょう』なんて調子のいいこと言っちゃって！　実は全然そんなこと思ってないんでしょ！」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ……」

アルトは呆れのため息をついた。

「あれは嘘じゃない。戦うのが一番楽だと判断したらちゃんと戦うよ。それで、いかに戦わないで勝てるかを必死で考えるさ」

「またおかしなことを……」

今度はクロノの方が呆れのため息をつくが、アルトは本気である。

別に矛盾する話ではない。

「それに、あれくらいのことは言っておかないと、王女殿下や宰相閣下に信頼してもらえなかっただろうし」

もっとも、二人ともかなり聡明な印象だったので、

ひょっとしたら必要ない言葉だったかもしれないが。

「ともかく、王国の庇護はランデオン領の安全のためにぜひ受けておきたいところだ。治安維持や外敵の襲撃に金や神経を使わなくて済むからね」

アルトの言葉に、クロノは頷きながら、

「そのためにも、王女様のお願いをきかなければいけないわけですね。アスルアニタ帝国の攻撃を防がなきゃ、と」

「アルスタニア帝国」

「アブクサニア」

「アルスタニア！」

「アルクタニタ！」

「惜しい……」

あまり惜しくない気もした。

「とにかくその帝国ですけど……そんなに大変なんですか？　一晩考えさせてくれ、なんて答えちゃって」

そう。

先ほどのリーゼロッテの提案に、アルトは即答しなかった。

なぜなら、

「他の国ならどこでも即答したと思うけどね。あそこだけは駄目だ。普通に考えれば、あの国が本

気で侵攻してきたら、勝てる国なんかこの大陸に存在しない」

神聖アルスタニア帝国。

百以上の小国がひしめくこの大陸の、ほぼ三分の一を占める領土を誇る、唯一の超大国である。

その歴史は浅く、成立はわずかに五十年ほど前。

しかし、その後、圧倒的な兵力と、それを支える強固な帝政で他国を併呑していく。

手に入れた土地の扱いに容赦はなく、歴史も伝統も無視して帝国の政治体制に組み込み、民と富を奪い尽くしてしまう。

そうしてアルスタニアはますます巨大な軍事国

家として成長していくのだ。

「まさに、脅威以外の何物でもない。もし大陸を統一して、この戦乱を終わらせる国があるとしたら、それはアルスタニアだ、っていう声もある」

「ふぅむ。それは、どうにかするのは大変そうですね」

「そういうわけ。ま、とはいえ、手がないこともない。だから、一晩返答を先延ばしにしたんだけど」

「一晩じっくり考えるんですか？」

「まさか。考えたって答えなんか出ない。もちろんこれを使うのさ」

と、アルトは歴史書〈イリスガルド興国記〉を取り出した。

ページを開くと、そこには、新たな一文が現れていた。

神聖アルスタニア帝国は、大部隊を編成し、イリスガルド王国へ進軍を始めた。二度目の決戦の始まりであった。

アルトは、その次の一文を書き込む。

イリスガルド王国へ進軍するアルスタニア帝国

軍は、その途中、兵糧倉庫で火事が発生して進軍が困難となり、撤退を余儀なくされた。

「さすがにこれが都合よく実現したりはしないだろうけど、こうしていくつか試してみて、撤退が実現しそうだったら、王女殿下の依頼を引き受ければいいんだ。俺の手柄にできるかどうかは、口八丁でなんとか――」

「あ、定着しましたよ」

「嘘っ!?」

いつになく驚きの声を上げて歴史書に視線を戻すアルト。

クロノの言葉どおり、アルトが書き込んだ一文は、しっかりと歴史書に馴染(なじ)んでいた。

「帝国軍が、兵糧の火事くらいで撤退するとはえない話じゃないか……」

……でも、これからの季節、乾燥するから、あり

プルプルと、肩を震わせるアルト。

「どうしたんですか、ご主人。お腹(なか)痛いんですか？」

「違うよ！　あはははは！」

我慢できない、というように声を上げて笑うアルト。

「どうやら俺に運が向いてきたみたいだ。こんな

簡単に帝国を追い返せて、しかも火事！」

「？　火事だとなにがいいんです？」

「ばっかだなぁ。俺が部下に火をつけさせたことにできるだろ！　つまり俺の手柄になる！」

「うわぁ……」

クロノはダメ人間を見る目で見てくるが、アルトは気にしない。

直接戦闘をしなければ、両国の被害は最小限。

リーゼロッテ王女も喜ぶし、アルトも得をする。

いいことずくめではないか。

最高に楽な結末だ。

「よし、さっそく殿下に、帝国のことを請け負う

とお伝えしにいこう」

アルトは礼服を再びきちんと身につけ、スキップしながら部屋を出た。

しかし当然――

――ことがそう簡単に運ぶはずもないのだった。

○

その頃、アグニェッタ領の屋敷から、一台の馬車が王都に向けて出発した。

そこに乗っているのは、ランデオン家の屋敷か

ら戻ってきていたエレナだった。

「……」

もともとは、そんなつもりはなかった。

アルトはランデオン男爵として、主人であるイリスガルド王国の王女の召喚に応じて王都へ向かったのだ。

それは光栄なことである。

それだけのことで、エレナが気にするようなことではない。

だが――。

リーゼロッテ王女のあの美貌。

それに、王女からの書状が届いたときの、アル

トの喜びよう。

『王国とのコネを作るチャンスだ。そりゃ喜ぶよ』

アルトはそう言っていたけれど……。

気になって気になって、屋敷でじっとしていることなどできず。

エレナは旅装を整え、屋敷を飛び出したのだった。

「べ、べつに、ちょっと王都見物に行くだけだし……」

誰(だれ)に対してなのかわからない言い訳をしながら、彼女はハンカチを取り出して握りしめる。

ずっと使い続けているものだ。もう、随分ボロボロになってきているのに、未(いま)だに手放せない。

――昔、アルトと一緒に乗馬の練習をしていたときのこと。

エレナは、転んで怪我（けが）をしてしまった。

大した怪我ではなかった。そんなことよりエレナは早く馬に乗れるようになりたかった。けれど、アルトは心配して、彼女を抱えて屋敷へ連れて帰った。大して体格に差のない子供の頃だというのに、汗だくになりながら、彼女を助けてくれたのだ。

そのとき、怪我した場所にアルトが巻いてくれたのが、このハンカチだった。

あげる、と言われたので、素直にもらい、それ以来使い続けている。

なんだか、この古びた布切れが、自分とアルトの繋がりを象徴しているみたいで、捨てるに捨てられないのだ。

（もう、アルトは憶えてないかもしれないのにね）

小さくため息をつき、それでもそれを丁寧にたたみ直しながら、エレナは落ち着かない気分で、外を流れる景色を眺めるのだった。

「辺境貴族、未来の歴史書で成り上がる～イリスガルド興国記～」試読版

終